https://www.daitoken.com/ ISSN:0286-6854

大学の図書館

第40巻第12号（No.577）

2021 12

大学図書館研究会第52回全国大会記録

2021年9月18日（土）～20日（月・祝）

（オンライン開催）

目次

第 52 回全国大会のまとめとして …… 178
会員総会記録 …… 179
研究発表（要旨） …… 185
記念公演 …… 187
課題別分科会 …… 188
（1）大学図書館史　（2）利用者支援
（3）資料保存　（4）キャリア形成
（5）学術情報基盤　（6）図書館経営
（7）図書館建築・デザイン　（8）出版・流通
協賛企業企画 …… 198
シンポジウム「アフターコロナの大学図書館」 …… 198
自主企画 …… 199
交流会 …… 200
協賛企業・団体一覧 …… 201
第 52 回全国大会　会員総会資料 …… 202
第 52 回全国大会　決算報告 …… 234
第 52 回全国大会　参加申込者名簿・運営役員名簿 …… 235

第52回全国大会のまとめとして

常任委員会

第52回大学図書館研究会全国大会は、2021年9月18日（土）から9月20日（月）の3日間、オンライン会議システムZoomを用いて開催されました。参加者は136名となり、盛況のうちに終了しました。

新型コロナウイルス感染症対策もあり、今回もオンサイトでの開催を断念し、全面オンラインで開催しました。

第51回全国大会に引き続き、オンライン会議システムに習熟することを目的のひとつとして、Zoomを用いたオンライン交流会を2ヵ月に1回、合計4回開催しました。

前回に引き続き、実行委員会形式での運営となりましたが、全国大会実行委員長の磯本善男さん、副実行委員長の加藤信哉さん、赤澤久弥さんには大変お世話になりました。篤く御礼申し上げます。

今回は、全国大会1日目に会員総会・研究発表・記念講演及び交流会を、2日目に8つの課題別分科会を、3日目にシンポジウムを開催しました。また、自主企画を2日目夜・3日目終了後に開催しました。

会員総会は、第51期（2020/2021年度）の活動報告・決算報告・会計監査報告について報告があり、審議の結果承認されました。続けて、第52期（2021/2022年度）の活動計画案・予算案・役員案について審議され、承認されました。また、「大学図書館研究会の会則改正」、「綱領、ガイドライン、ミッション・ステートメントの取り扱いについて」も、審議の結果、承認されました。

研究発表は、久保山健さんによる「ウェブスケール・ディスカバリー（WSD）利用者の利用状況と認識 − インタビュー調査による探索的研究 − 」、また川端幸枝さんによる「アフターコロナを見据えた魅力的な大学図書館運営〜大学図書館のオンライン授業対応化と学生協働による文献ガイダンス用e-Learningコンテンツ作成〜」の発表があり、活発な質疑応答が行われました。

記念講演は、加藤信哉国際教養大学中嶋記念図書館長・特任教授による「大学図書館の位置づけについて」があり、これまでの大学図書館のあり方を踏まえつつ、直近の大学図書館の課題についてのご講演がありました。

また、初めて大学図書館研究会の全国大会に参加される方向けに、「ウェルカムガイダンス」を2回開催し、計25名の参加がありました。

2日目の午前は、大学図書館史、利用者支援、資料保存、キャリア形成の4つ、午後は、学術情報基盤、図書館経営、図書館建築・デザイン、出版・流通の4つ、計8つの分科会を開催しました。会員が講師を務めたり、参加者同士で活発な議論が行われたりするなど、主体的な参加が目立ちました。

3日目のシンポジウムは、「『アフターコロナの大学図書館』-アフターコロナ社会の情報提供を考える-」が開催されました。前半は、Independent Librarianの小嶋智美さん、大学生協事業連合勉学研究事業部の鷲嶺奈緒子さん、千葉大学附属図書館の磯本善男さんからそれぞれご講演をいただき、後半は郡山女子大学短期大学部の和知剛さんのコーディネイトの下、ディスカッションを行いました。参加者は85名で、フロアからの非常に多くの質問の応答、登壇者間の相互質問等の議論が行われました。

自主企画は、2日目夜に、1年ぶりに恒例「オンライン地酒の会」を、3日目午後に「次回大会へのご要望お聞きします」、合計2つが開催され、「オンライン地酒の会」は14名、「次回大会へのご要望お聞きします」は11名の参加者がありました。

今回は、2日目昼に、企業協賛企画として「協賛企業プレゼンテーション」を開催し、

株式会社カーリル様による「図書館をもっと楽しく。カーリルの最新の取り組みについてのご紹介。」、株式会社サンメディア様による「ディスカバリーサービスを通じた電子ブックの提供」、日本事務器株式会社様による「大学生の読書記録・読書レビューに関する新サービス企画のご案内」の、それぞれ15分間のプレゼンテーションがありました。

最後になりましたが、今回の全国大会開催にあたっては、EBSCO Information Services Japan株式会社、NPO医学中央雑誌刊行会、株式会社カーリル、株式会社紀伊國屋書店、株式会社規文堂、株式会社サンメディア、株式会社シー・エム・エス、株式会社ソフエル、日外アソシエーツ株式会社、日本事務器株式会社、日本ファイリング株式会社、株式会社ネットアドバンス、有限会社藤井洋書、株式会社メタ・インフォ、の各社様にご協賛いただきました。大学図書館研究会の研究活動をお支え下さり、心より御礼申し上げます。

来年の全国大会もオンライン大会となりました。また、みなさまにお会いできることを楽しみにしております。

大学図書館研究会第52回全国大会記録

会員総会記録

日時：2021年9月18日（土）　13:00～15:25

■大会開会宣言：上村事務局長
　挨拶：呑海委員長
　　磯本全国大会実行委員長
　会員追悼
　　物故者：松田上雄氏
　　（追悼の言葉：呑海委員長）
　　河手太士氏
　　（追悼の言葉:得能全国委員（北海道地域グループ））
会員総会開会
議長選出
　立候補なし
　事務局推薦（挙手にて承認）
　　山口和美（東京地域グループ）
　　渡邊さよ（広島地域グループ）

◆第1号議案
第51期（2020/2021年度）活動報告
・活動日誌
・地域グループ報告
・研究グループ報告
・常任委員会等報告（常任委員会･小委員会）
・ワーキンググループ報告
・事務局活動報告
　上村事務局長から、事務局本体と事務局が内包する会計、出版、組織にて事務処理を進めたとの補足説明があった。

（質疑）
・野村（東京地域グループ）
　地域グループ報告で「グループ報の発行」が「なし」のグループは、「グループ報」自体の発行を中止しているのか。
　→「グループ報」を発行しているグループと発行していないグループがあり、前期に発行しなかったグループについて「なし」と記載されている（呑海委員長）。
・堀越（グループ無所属）
　埼玉地域グループで解散を決定した経緯を、差し支えなければ、教えていただきた

い。
→埼玉地域グループからの報告によると、最近は活動ができておらず、また、グループ長の後任が見つからないため、解散するとのことである（呑海委員長）。

（採決）承認

◆第2号議案
第51期（2020/2021年度）決算報告・会計監査報告
上村事務局長から、以下の補足説明があった。
・2020/2021年度一般財政決算報告：収入にて、雑収入が予算額より高額であるのは、旧新潟支部から残金の寄付があり繰り入れたため、支出にて、印刷・発送委託・通信費の決算額が予算額の約3/4であるのは会員向けの会報の印刷、発送が中止となったため、交通費が0円であるのは全国委員会、常任委員会、会計監査をオンライン開催としたためである。
・2020/2021年度大会基金決算報告：第51回全国大会の収入が予算を上回ったため、収入にて、一般財政からの戻りの決算額が予算額以上となった。
・2020/2021年度出版財政決算報告：支出にて、通信費が予算額を上回ったのは、出版物の取り扱いに関して、書店等の購読者に調査をしたためである。
・2020/2021年度五十周年事業基金報告：シンボルマークのみ予算の執行があった（記念出版物、海外図書館研修ツアーについては執行なし）。
・2020/2021年度会計監査報告（上村事務局長代読）

（質疑）質問なし
（採決）承認

◆第5号議案
第52期（2021/2022年度）役員案
呑海委員長から、役員案（全国委員、会計監査）が提示された。「特定常任委員」について、特定業務を担当し、委員会に出席する義務はない常任委員であるとの補足説明があった。
会員総会中の役員立候補はなかった。

（採決）承認

退任となる得能全国委員（北海道地域グループ）、西脇常任委員（東京地域グループ）から挨拶があった。

休憩　13:55 ～ 14:10
休憩中、第52期（2021/2022年度）第1回全国委員会開催

第1回全国委員会報告
（1）委員長・副委員長・事務局長選出
委員長：呑海沙織
副委員長：赤澤久弥
事務局長：上村順一
（2）来年度の全国大会の開催地について
呑海委員長から、オンライン開催とすることが提案されたとの報告があった。
（3）委員長・副委員長・事務局長挨拶

◆第3号議案
第52期（2021/2022年度）活動計画案
・常任委員会
・小委員会
・五十周年記念事業
・ワーキンググループ
呑海委員長から、出版・管理ワーキンググループは、第51期でその役割を終えたため、活動を終了するとの確認があった。
・その他の意見交換
呑海委員長から、出版物の販売に関して、

2021年発行分から、会員には出版物のデジタル頒布、購読機関には継続して紙版を販売してきたが、紙版の販売について、継続、縮小、廃止を含めて意見をお聞かせいただきたいとの発言があった。

（質問・意見）
・野村（東京地域グループ）
購読機関の割合はどのくらいか。
→割合はすぐには算出できないが、会員総会資料の20ページに継続購読数の記載がある（2021年6月30日現在、会報160件173部、会誌95件103部）（市村運営サポート会員）。

・野村（東京地域グループ）
会報の発行頻度の変更に関して具体的な案は出されているか。
→会報の頻度については、次の議題で取り上げるが、とくに具体的な案は出されていない（呑海委員長）。

・山下（九州地域グループ）
会報は、紙版が到着すると、職場内で回覧して意見交換をするなど、活用させていただいている。作業のスリム化のために、支払いを1～12月分前払いに統一できればよいと思われるが、1～12月分前払いの支払いが困難な購読機関はどのくらいあるのか。
→具体的な数字は出せないが、今年の2～3月に購読機関対象に実施した調査では、約6割は対応でき、残り4割前後が、後払い、4～3月分支払いなど、他方法の支払いを希望していた（市村運営サポート会員）。
→その他、入金についても、直接支払い、代理店経由と複数の方法に対応しており、現在の多様な支払方法のままアウトソーシングすると複雑化するため高額となる。山下さんからの指摘どおり、館内で紙版を利用できるとよいので、寄贈用として紙版を作成するという対応も考えられる（呑海委員長）。

・山下（九州地域グループ）
年度をまたがない4～3月分前払いの支払い方法は候補に入れていないのか。
→会報の巻が1～12月サイクルで、印刷業者との契約も1月に始まるので、1～12月で統一したい（呑海委員長）。

呑海委員長から、会報は、大学図書館の動きを知るために貴重な発行物であるが、企画・編集にコストがかかっているため、見直す必要があると考えている。会報の発行頻度について意見をお聞かせいただきたいとの発言があった。

（質問・意見）
・渡邊（京都地域グループ）
会報を毎月読むことができることは励みになり、刺激になる。とはいえ、企画・編集に労力がかかるのであれば、なるべく継続できるように、発行頻度を落とす等の措置もやむを得ないと思われる。年間で繁閑期の波があるなら、閑期は1号に2本の特集にするなど、年間でバリエーションをつけることも考えられるのではないか。
先ほどの出版物の販売に関して、紙版が中止となったとしても国立国会図書館への納本は続けるのか。
→その場合は、デジタル版の納品としたいと考えている。

・渡邊（広島地域グループ）
年間スケジュールで月刊が困難な時期があれば、その時期は合併号としてはどうか。

→本日いただいた意見を参考にして、出版物

の販売、会報の発行頻度について、常任委員会、全国委員会で考えていきたい（呑海委員長）。

（質疑）
・山下（九州地域グループ）
海外図書館研修ツアーへの参加について、職場内で了承され、来年度予算で申請の予定であるが、実施の可能性について教えていただきたい。
→決定が遅れてしまい申し訳ないのだが、委員会内では、来年度の実施は難しく、ツアーはいったん中止となる可能性が大きいと考えている（中筋海外図書館研修ツアー検討小委員会委員長）。

（採決）承認

◆第4号議案
第52期（2021/2022年度）予算案
上村事務局長から、以下の補足説明があった。
・2021/2022年度一般財政予算案：収入にて、会費予算が前年度より減額となっている。会員の皆様に、新会員の加入にご協力いただきたい。支出にて、印刷費は、会報が会員へはデジタル頒布に変更となったため、会報の印刷費を含まなくなったこと、編集費には外部査読費を、会議費には全国大会実行委員会の課題管理用にbacklog使用費を、雑費には事務局外注費を含めて計上していることが前年度からの変更として挙げられる。なお、委員会、会計監査のオンサイトでの開催の可能性もあるため、交通費を計上している。
・2021/2022年度出版財政予算案：支出にて、印刷費に購読機関に送付する会報、会誌の印刷費を新たに含めており、その他、出版物販売委託費の費目を追加している。
・2021/2022年度五十周年事業出版財政予算案：海外図書館研修ツアーは、先ほど、実施できるか不明であるとの説明があったが、予算は計上している。

（質疑）質問なし
（採決）承認

◆大学図書館研究会の会則改正
呑海委員長から、「大学図書館研究会」への改称（2021年1月1日）に伴い、会則の改正が必要であり、これを機に、名称以外の部分についても実情に合わせた会則とする提案と改正会則案の内容について説明があった。本改正案は、2020/2021年度第4回全国委員会（2021年3月20日）にて承認済みである。この改正会則は、改称日である2021年1月1日の施行としている。なお、新旧対照表の記述が通常の形式に準じていないとのご指摘をいただいており、十分に対応できていない部分があるが、ご了承願いたいとの補足もなされた。

（質疑）
・野村（東京地域グループ）
第12条で、「副会長は、全国委員のうちから会長が指名」となっているが、会長が指名した後、全国委員会で承認を得るなどのプロセスはないのか。
→改正案に書かれているとおりである（呑海委員長）。

副会長は会長が指名して決まるということだが、立候補や互選はなく、会長が決めるということか。
→改正案に書かれているとおりである。運営上、会長が決めるということにした。ご意見として承る（呑海委員長）。

・野村（東京地域グループ）
改正会則は2021年1月1日の施行であるが、

会員総会で承認を得る前の施行としてよいのか。
→さかのぼっての施行は一般的に見られることであり、常任委員会、全国委員会でも2021年1月1日施行との認識である(呑海委員長)。

・市村（運営サポート会員）
「委員長」が「会長」に変更となることについて、出版部では、2021年1月以降、既に「委員長」名で請求書を発行しているが、差し替える必要はあるか。
→購読機関には、変更についての案内を出す。差し替えが必要な機関があれば対応する。
本日は、大筋についてご議論をお願いしたく、出版部での対応については、後日、ご相談したい（呑海委員長)。

(採決）承認

◆綱領、ガイドライン、ミッション・ステートメントの取り扱いについて
呑海会長から、現在、綱領、ガイドライン、ミッション・ステートメントの3つが存在し、これら3つは重なり合う性格を持つため、2020/2021年度第4回全国委員会（2021年3月20日）にて審議した結果、綱領とガイドラインはアーカイブ化し、会の名称を変更した上で、ミッション・ステートメントのみ維持することとしたので提案するとの説明があった。

(質疑)
・野村（東京地域グループ）
ミッション・ステートメントに統一するという案に賛成である。一方、綱領とガイドラインはアーカイブ化するということだが、アーカイブ化とはどういうことか教えていただきたい。
→現組織では運用しない、アーカイブとして保存するということである（呑海会長)。

保存ということは、大図研のウェブサイトに保存されるのか。
→そのように予定している（呑海会長)。

・山下（九州地域グループ）
議案には賛成である。
ミッション・ステートメントを維持する上で、現在記載されている会の名称を変更することが必要であるので、ミッション・ステートメントの改正手続きに関する取り決めも必要と思われる。
→冒頭でご説明したように、ミッション・ステートメントは、会の名称の部分を改めた上で、維持する。また、ミッション・ステートメントの改定は、会員総会での承認が必要であるし、一方で、ミッション・ステートメントはそうそう変えるものではないと思っている（呑海会長)。

(採決）承認

(議長）事前に提出した議案はすべて終了した。出席している会員から他に議案として何かあれば提案して欲しい。

・加藤晃一（千葉地域グループ）
議案ではなく情報提供。「図書館界」73巻3号（通巻422号）に「日本図書館研究会75周年記念若手座談会報告（第1回)」が掲載され、日本図書館研究会の会員であり、大図研の会員でもある方が登壇されており、大図研に触れている箇所があるので、今後の大図研の活動の参考になるところもあると思う。お手元にある方はご一読いただきたい。

（議長）他になければ、これで会員総会を終了する。進行を事務局に返す。

議長解任、議長への謝辞（上村事務局長）

会員総会終了

大学図書館研究会第53回全国大会のご案内

第53回全国大会が、以下の日程と内容で開催予定です。
詳細については、今後、大会Webサイト等で随時ご案内していきます。

日程：2022年9月17日（土）～9月19日（月・祝）
開催方法：オンライン形式

プログラム：
9月17日（土）
　・会員総会　　・研究発表　　・記念講演　　・交流会
9月18日（日）
　・課題別分科会
　　第1分科会：大学図書館史　　第2分科会：利用者支援
　　第3分科会：資料保存　　第4分科会：キャリア形成
　　第5分科会：学術基盤整備　　第6分科会：図書館経営
　　第7分科会：図書館建築・デザイン　　第8分科会：出版・流通
9月19日（月・祝）
　・シンポジウム

全国大会は大図研の中心となる活動です。ついては、会員各位のご参加はもとより、皆様の廻りで大図研の活動や大学図書館を巡る状況に関心をお持ちの方に、お知らせいただけると幸いです。

また、全国大会は、有志で構成する全国大会実行委員会により、企画や運営を行うもので、ご参加いただくと企画から関われる機会となります。

実行委員会に参加を希望される方は、以下までご連絡ください。

【お問い合わせ先】
全国大会実行委員会：taikai@daitoken.com

研究発表（要旨）
9月18日（土）16:00～16:45

「ウェブスケール・ディスカバリー（WSD）利用者の利用状況と認識 -インタビュー調査による探索的研究-」

久保山　健（大阪大学附属図書館）

問題意識としては、ディスカバリーサービスとも呼ばれるツールが登場して10年ほどが経過するのに、導入が広がらないばかりか、想定する利用者層や利用シーンについても一定のコンセンサスもない状況が続いていることがありました。

利用する側の考えや行動に関する調査も少なく、利用経験者を対象にインタビュー調査することにしました。

その結果、OPACが図書館サイトの最初の検索オプションであり、多くの人には使われていない大学での状況について、利用者の認識の一端を示すことはできたと思っています（発表内容は、発表資料を参照。文末にリンクを記載します）。

発表後に、次のような質問がありました。私の回答も含めて、（記憶に基づいて）概要を記します。

（1）WSDのメリットや推しは何か。

回答：あくまで本調査から言えることに限られるが、「幅広さ」であると思われる。それを伝えつつ、利用する側の反応を見ながら、推しのポイントを再調整していくことが大事と思われる。

（2）図書館員がWSDをどう思っているかについての調査は？

回答：その点はテーマ検討の段階で出てきたが、調査の意義の点で利用者を対象にすることにした。

3つ目の質問はちゃんとメモしていませんでしたが（スミマセン）、利用のきっかけについてだったように思います。きっかけについては、調査対象者を探している時のエピソードが思い出されます。

顔見知りの教員を通じて、ある理系の研究室にお邪魔した時のことです。その研究室でWSDを使っている人はいないようでした。Google ScholarやプレプリントサーバであるarXivを使っている人が多いようでした。それらのツールについては、周囲から教えられることが多いようでした。

そこで伺ったエピソードから展開すると、あるツールを使うようになるには、次のような段階を経るのではないかと思いました。

つまり、(1) 存在を知る、(2) 使ってみる、(3) 有用と思う。

まぁ当たり前という気もしますが、OPACが最初の検索オプションで、WSDがあまり知られていない大学では、この最初の段階をどうするのかというのが最初のステップのようにも思いました。

多数を対象にする授業などで（かつ適切な内容で）取り上げない限りは、この最初のステップは「周囲から教えられる」が一般的になるように思います（但し、周囲から教えられるくらい認知度が上がる必要があるでしょう）。

今回の発表資料は、以下のURLで公開しています。

http://hdl.handle.net/11094/84802

元となった修士論文も、以下のURLで公開しています。

http://hdl.handle.net/11094/83311

（久保山　健）

アフターコロナを見据えた魅力的な大学図書館運営〜大学図書館のオンライン授業対応化と学生協働による文献ガイダンス用 e-Learning コンテンツ作成〜

川端　幸枝（酪農学園大学附属図書館）

1．問題の所在

アフターコロナにおいて、地方都市に位置する私立大学は学生獲得競争がより激しくなる。それは少子化・過疎化により地方学生人口が減少すること、また地方私立の「公立化」による人気向上があるためだ。そのため図書館運営においても経費削減が求められる一方、学生獲得においても図書館のサービスの水準維持や魅力的な図書館づくりが求められる。さらに、現行の感染症拡大防止への対策も引き続き必要とされている。

本学においてもこれらの課題を対応させるため対面での図書サービスのオンライン化を進めている。経費削減をしつつも学生サービスを充実させるのは困難であるものの、そのなかで工夫が求められているといえる。

2．本学での取り組み

本学では経費削減と魅力的な図書館づくり、さらには感染症拡大防止それぞれを行える①文献データベース用e-Learningコンテンツ作成と②オンライン授業用スペースの拡充について取り組んできた。

①についてはこれまで職員が対面で実施していた文献ガイダンスをe-Learningコンテンツにすることで感染予防のほか職員が少なくても運営可能なようにしている。ここにおいてはコスト削減を図るため外注ではなく図書館内で作成するものとした。その際に「学生協働」の取り組みも行っている。これは本学学生にコンテンツのナレーションおよび動画編集を依頼し、職員と協働で作成するというものだ。その結果、ユーザー目線でのコンテンツ作成が可能になった他、関わった学生が仕事についての学習および文献データベースそれ自体の使い方も学ぶ機会となった。

②については感染症拡大予防のためオンライン授業が行われる際、自宅ではネット環境がない学生の声を受け附属図書館6階に新設するものとした。従前より需要が低かったAVブースを改造することでほとんどコストをかけずに設置できた。その他、授業内での発表準備のために学生が打ち合わせや集まっての調べ学習ができるラーニング・コモンズの設置も進めている。いずれも学生が積極的に図書館を利用する契機にもなり、テスト期間の有無に関わらず学生の利用が拡大する結果となった。

①･②の取り組みの今後の展望として、(1) ネット検索が日常化しているからこそこれまで附属図書館での文献ガイダンスで話していたような原理面から検索手法を伝えていく必要があるということ、(2) もっと多様なe-Learningコンテンツを作成し図書館サービスの質を高めていくことの点があげられる。また今後の課題として、(3) 文献データベースの仕様は定期的に変わるのでそれらにどのように適応していくか、(4) 新たな図書館員・学生スタッフの育成をどのように行っていくかが課題として上がっている。

3．発表の中での質疑応答

発表を受けて集まった質問には学生協働に関しての取り組みが多かった。「文献データベースを使える学生が作成を行っているのか」という質問については「収録を手伝ってくれた学生自身が文献データベースを学ぶという意味もあるので、特に知識がある学生が行ったわけではありません」とお答えした。

また「コンテンツ作成は大学が主体として制作したものであるか」という質問もあった。この質問には、附属図書館での取り組みはあくまで人手不足対策から附属図書館側の発案から行ったものではあるが、大学からの許可

をとった上で進めることとした。いずれも新たな取組として賛同いただいている。

今回の発表の中で非常に有益なご意見・ご感想を伺うことができ、筆者としても学ぶことの多い機会となりました。厚く御礼申し上げます。

（川端幸枝）

記念講演

9月18日（土）　17:00～18:00

大学図書館の位置づけについて

加藤　信哉（国際教養大学図書館）

第52回全国大会の記念講演は、筆者が「大学図書館の位置づけについて」という題で行いました。

初めに記念講演の趣旨について、大学図書館の位置づけについてグランドデザインを描くことでもなければ、大学図書館の位置づけの具体的課題について処方箋を示すものではなく、大学図書館の位置づけについて関連する様々な資料をご紹介し、皆様と一緒に考えてゆくものである、と説明しました。

前半の「今までの大学図書館の位置づけ」では、法律・規則や政策文書である、大学設置基準、科学技術・学術審議会の答申等、大学の学則、中期目標・計画、図書館のミッション・ステートメントから、言い換えると制度面から振り返りました。これらに基づいて、(1) 大学設置基準は、平成3（1991）年度以降、図書館関連の規定の改正が行われず、図書館の実態とそぐわない、(2) 科学技術・学術審議会での答申では、大学図書館は学術情報基盤の役割の一部という扱いであり、2010年を最後に、大学図書館を対象とする独立した答申は出されていない、(3) 大学の学則には施設としての図書館の規定があるが、図書館の役割や機能の規定は少ない、(4) 国立大学法人や公立大学法人の中期目標・計画では図書館が独立した事項となっている大学は少なく、ミッション・ステートメントを規定している図書館も少ない、(5) この30年間で大学の数、人員、予算が増加しているにもかかわらず、大学図書館の、人員、予算、（購入）図書数は減少している、とまとめました。

後半では「これからの大学図書館の位置づけ」を探るために、John Coxによる「大学の中の大学図書館の位置づけ」についての文献レビュー[1]から、全体の状況、ステークホルダーの視点、ポジショニングについての戦略的対応、学生の成功（student success）に向けたポジショニング、研究の生産性に向けたポジショニングについて概要を紹介しました。また、国立大学図書館協会が2021年6月に公表した「国立大学図書館協会ビジョン2025」[2]を取り上げました。

最後に、(1) 図書館はもはや大学のキャンパスの中心ではない、(2) 大学は競争の激化（学生の取り合い）、グローバル化、市場化にさらされている、(3) 図書館は親機関である大学の運営の変化に対応せざるを得ないし、対応しない場合は地位が低下する、(4) ステークホルダーによる図書館に対する従来の認識が、図書館のポジショニング／リポジショニングを難しくする、(5) ウィズコロナ時代における大学の教育、研究、社会貢献についての積極的発言（提言）と行動が図書館に求められている、とまとめました。

参加者から、研究支援業務としての研究データ管理の具体的イメージと大学図書館業務やサービスに果たすベンダーの役割について質問がありました。

来年3月で退職を迎える小生に、大学図書

館研究会に名称を変更した最初の第52回全国大会で記念講演の機会を与えていただいことに深謝いたします。

注）

1）Cox, John. Positioning the Academic Library within the Institution: A Literature Review. *New Review of Academic Librarianship*. 2018, 24（3/4）, p.217-241.

2）国立大学図書館協会. 国立大学図書館機能の強化と革新に向けて：国立大学図書館協会ビジョン2025. 国立大学図書館協会, 2021, 4p. https://www.janul.jp/sites/default/files/vision2025.pdf

（加藤信哉）

課題別分科会

9月19日（日）　9:30～12:30
14:00～17:00

第1分科会　大学図書館史

テーマ：大学図書館問題研究会の歴史を見るPart5

担当者：加藤晃一、小山荘太郎

参加人数：10名

司会：小山荘太郎

報告者・報告タイトル：

小山荘太郎「大学図書館問題研究会の歴史を見るPart5　1990年～2000年の大図研の動き」

加藤晃一「『図書館にドン・キホーテがいた頃：1980～90年代の図書館少数者運動』に見る大学図書館問題研究会」

配布資料：

・「第1分科会_資料1略年表」
・「第1分科会_資料2支部・地域グループ・研究グループ一覧」
・「第1分科会_資料3全国大会分科会一覧」
・「第1分科会_報告1990年～2000年の大図研の動き」
・「報告『図書館にドン・キホーテがいた頃：1980～90年代の図書館少数者運動』に見る大学図書館問題研究会」
・「学術情報システムをめぐる議論キーワード」
・「学術情報システムをめぐる出来事(年表)」

この分科会は、前回まで4回にわたって開催されてきた、会報および支部・地域グループの活動を見ることを通じて、結成以降の大図研の活動と大学図書館の歴史を振り返り論議するという企画を引き続ける形で開催された。

分科会は9時30分から12時30分までの3時間、まずは小山報告がおこなわれ、休憩を挟み加藤報告、その後30分程度、参加者からの発言という流れで進められた。

小山報告は、会報『大学の図書館』および当時を知る参加者のオーラル・ヒストリーを史料として、1990年から2000年にかけての大図研の動きを振り返るものであった。

加藤報告は、今年出版された図書『図書館にドン・キホーテがいた頃 1980～90年代の図書館少数者運動』（東條文規、ポット出版プラス）における学術情報システムに関する記述およびそれに関する大図研の記述について紹介するとともに、会報中心で振り返られてきた大図研史を別の視点から見てみるというものであった。

小山報告は、大図研の歴史について、委員長の交代や大図研オープンカレッジの初開催、大図研電子掲示板の導入、全国大会ウェブサイトの初制作、大図研メーリングリストの開始など、節目となる出来事を強調した内容であった。

加藤報告は、東條の著書について、発表のテーマに関連する記述を適宜参照、引用しつ

つ、当時の大図研および大学図書館界の実情について、発表者の視点から振り返る内容であった。

質疑応答においては、1990年代前半、外資系参入による外国雑誌の契約・納入方式の新たな動きについて会報に長い記事が掲載され、それが実務において参考となったことなど、多くのコメントがあった。

私事ではあるが、当報告を書いている今野自身も現在、学術情報システム導入に対する受容史の研究を試みているため、質疑応答の時間は、筆者の研究に関する相談会のような状態になってしまった（ことを、他の参加者の皆様に対して、若干申し訳なく思っていることをここで書き添えたい）。その結果、筆者としては様々な有益な情報を得ることができたが、とりわけ印象深かったのは、主に関西で活動していた「かみかた機械化研究グループ」という研究グループが、『「学術情報システム」その現状と課題：研究情報と大学図書館のゆくえ』（1985年）といった図書3冊を、かつて出版していたという事実である（他の2冊に関する書誌的情報については、CiNii Books をご覧いただきたい https://ci.nii.ac.jp/author/DA0111278X）。

参加者によると、この研究グループの名称「かみかた」は、漢字にすると「可味方」ではあるものの、「上方」とのダブル・ミーニングのニュアンスも込めて、ひらがな表記となったとのこと。筆者は大図研に加入して早くも約10年となるが、恥ずかしながら、上記の図書3冊のみならず、これらを含めた「大図研シリーズ」という叢書が存在することも認識していなかった。この叢書についてはウェブ上での案内（https://www.daitoken.com/publication/series.html）の通り残念ながら現時点ですべて「在庫なし」という状況であるようだが、大学図書館には一定の所蔵が確認できる。このシリーズは、大学図書館の歴史を振り返る上で貴重な資料と言えるのではないかと思った。

筆者は図書館史の研究をしていることもあり、これまで大図研の全国大会に出席した際は、なるべく大学図書館史の分科会に出るようにしてきた。この企画も早くもPart5となったわけだが、できるならば次回以降の全国大会でも、2001年以降の歴史を詳細に振り返る、あるいは各支部の歴史を詳細に振り返るといったコンセプトで、同様の企画を続けていってほしいと切に願う。また、この分科会での発表内容だが、可能であれば、論文にするなどして、しっかりと活字化して公表していただければ良いのではないかと思った。

（今野創祐）

第２分科会　利用者支援

テーマ：もっと知りたい！ILL　～ILL・図書館間相互協力を取り巻く諸問題について～
担当者：下山朋幸、安東正玄
参加人数：30名
司会：下山朋幸
報告者・報告タイトル：
　河野由香里氏（北海道大学附属図書館）
　「北海道大学附属図書館note掲載記事『消された文字が語るもの』から　海外ILL業務のご紹介」
配布資料：
　なし（事前および終了時アンケートあり）

第2分科会（利用者支援）では、幅広く「ILLに関する諸問題」をテーマとした。

前半はテーマ設定の趣旨・事例報告・司会からの問題提起があり、後半は4つのグループに分かれてディスカッションと発表という形で進行した。

冒頭、まず司会者よりテーマ設定の趣旨が説明された。昨年度の利用者支援分科会「新型コロナウイルス禍における利用者サービスの今までとこれから」においてILLに関する

ことが話題に上ったこと、反面ILL業務は経験者が限られているのでなかなか話題に取り上げられる機会が無いという実情から、このテーマを設定されたという事であった。その後参加者が自己紹介を行ったが、ほとんどのメンバーが何らかの形でILLの実務または業務管理の経験があった。

事例報告は、河野由香里氏が北海道大学附属図書館のnoteに執筆された、海外ILLに携わっていた当時のエピソード「消された文字が語るもの」（https://note.com/hu_library/n/nfad0b6018231）という記事とその反響等について発表された。

その後司会の下山氏より自身のILL業務の経験を通して、このサービスにおけるさまざまな課題が提示された。

後半は4つのグループに分かれて自由なテーマでディスカッションを行い、その後各グループが発表を行った。

第1グループは主に海外ILLのチャンネル減少が話題に上がった。グローバルILLやBLDSCの終了などで、WorldShare ILL未参加の機関は海外に依頼するチャンネルが無くなってきているという事であった。ただ、本日ドイツのドキュメント・デリバリーサービス“Subito”（https://www.subito-doc.de/?lang=en）を知ることができ、参加を検討したいという意見もあり、そのような情報を共有するために、海外ILLに関する図書館員向けのパスファインダーがあれば良いのにという希望が出た。

第2グループではILL依頼／受付対象資料について、オープンアクセス論文をどこまで探すか、リポジトリ資料をどこまで信頼して提供するかという事が話し合われた。機関リポジトリに収録されている論文が本当に最終稿なのかという疑問に対しては、大阪大学のリポジトリにある「著者版フラグ」が紹介された。これはリポジトリ収録原稿が出版におけるどの段階のバージョンであるかを示しているという事である。

第3グループでも第1グループ同様海外ILLのチャンネルの問題が話し合われた。また、小規模館では担当者が少なく、日常的に相談をする相手がいないのではないかという心配事も述べられた。

第4グループでは電子ジャーナルに対して依頼・受付をしているか、また電子の契約機関をどのように探しているかが話し合われた。それから無償化については、学部事務局などと連携した道が探れるのではという意見があった。

各グループ発表後も「会計処理の方法」「研究室資料の取扱い」「CAT2020の業務への影響の有無」「白黒／カラー複写の切替え基準（相手館に照会するか自己判断するか）」や「図書・雑誌の区別をどう判断するか」など、普段なかなか聞く機会のない、実務に即した悩み事も挙げられ、都度回答できる参加者よりさまざまな事例が紹介された。

以上のように当分科会では日々の地道な業務から、これからのILLの在り方まで、さまざまなトピックを大小の区分なく取り扱い、忌憚のない意見や各館の事情が明らかにされた。著作権法の改正や電子リソースの契約情報共有など、ILLを取り巻く環境はまさに変化の過渡期であり、今後数年で業務内容が大きく変わる可能性が高い。分科会中で話題に挙がったトピックを中心に、今後も情報を逃さず、「本当に利用者の役に立つILL業務」の在り方について考えていきたい。

（徳田恵里）

第3分科会　資料保存

テーマ：日本十進分類法新訂10版への移行と既存資料
担当者：楫幸子、得能由貴
参加人数：37名
司会：楫幸子

報告者・報告タイトル：

1. 藤倉恵一氏（文教大学越谷図書館・日本図書館協会分類委員会委員）「日本十進分類法新訂10版への移行と展望」
2. 堀米拓哉氏（日本大学図書館歯学部分館）「日本大学図書館歯学部分館における歯学図書の分類改訂」

配布資料：

・日本十進分類法新訂10版の移行と展望

第3分科会は「日本十進分類法新訂10版への移行と既存資料」をテーマに、前半は事例報告2件、後半は事前アンケート結果の報告や参加者からの情報提供・意見交換といった形で行われ、最後には移行についてのアンケート投票も行われた。

まず、藤倉氏から、NDC新訂10版までの改訂の経緯と移行のポイントについて解説があった。10版においても、9版の改訂方針を踏襲し「NDCの根幹にかかわる体系の変更はしない」方針で進められたこと、どういった内容の整理が行われたか、主な改訂箇所一覧や参考資料も示された。特に、大きく変わった007、547.48、548、694のそれぞれの概念の整理や、削除された546電気鉄道に関しては使用している場合は移設した方がいいというアドバイス、既存資料については必ずしもすべて移行する必要はなく、必要な箇所だけに絞る・優先順位をつけるなど、資料寿命や蔵書の分野等自館の状況に合わせてコンパクトな分類移行を、とのお話は、現在9版を使用しており10版への移行がまだの立場からすると気持ちが軽くなった。

堀米氏からは、歯科学図書分類のD分類を改訂され、既存資料を移行（ラベルの貼り替え、移動）の作業について報告いただいた。新分類を考える、対照表を作る、Excel、テキストで置き換えデータを作成、作業日に一括で変更、ラベルの貼り替え…といった作業の流れや、どこにどれくらい時間をかけたか、作業管理や情報共有をどのように行ったかといった話はこれから移行を考えている館にとっては貴重な内容だったと思う。特に作業管理については紙に出して皆で見てもらい情報共有をしたとのこと。なお、報告の詳細は「医学図書館」2020;67（1）:28-33に事例報告として掲載されているので、ぜひ参照されたい。

意見交換では、既に10版に移行を行った機関の参加者からの情報提供があった。最新のNDCを使用する、という館の基準がある大学では開架図書の内およそ1,000冊程度変更したとのこと。書庫のものは必ずしも変更しなくても良いが、複本で開架・書庫で分類が違うものについては、気がついたものは変更したそうで、参加者からは図書館員としては開架と書庫で請求記号が違うと気持ち悪いが、利用者はそんなに意識していないのではないか、との意見も出ていた。またある大学では、新キャンパス図書館に既存の2キャンパスから図書を移設することに伴いNDCを合わせる必要があったため、10版に切り替え・移行を行ったとのこと。移行に対してのポリシーの作成や、移行表の作成、予算申請など大量に処理する際には事前準備がとても重要になってくると感じた。

その他、分類業務の質をどのように維持しているか、という質問について「後から相互チェックを行っている」「目録をとるときにタイトルでチェックし、旧版があればすぐ取りに行き変更する」「業務委託も入っているが、最終チェックは職員が行う」といった意見があった。最後に「新版が出たとき、あなたなら再分類する？（対象は開架）」というアンケートが取られ、再分類する（16%）、一部を計画して再分類（35%）、問題があれば（45%）、しない（3%）との結果になった。多くの示唆があり、有意義な分科会となったことに感謝申し上げます。

（郷原祐佳里）

第4分科会　キャリア形成

テーマ：子育てと仕事の両立を考える
担当者：柿原友紀、中川恵理子
参加人数：15名
司会：柿原友紀
配布資料：
R3第4分科会進行資料（事後共有）

第4分科会「子育てと仕事の両立を考える」に参加しました。15名ほどの少人数で、参加者のお子様の声も交りながらの、和やかな分科会でした。参加者はまさに子育て中の当事者の方から子育てを終えられた方、同僚に子育て中の方がいらっしゃる方、管理職の方まで幅広い属性で、様々な角度から意見を伺うことができました。

1．分科会の流れ

本分科会は会報7月号との連動企画ということで、まずは会報「特集:子育てとキャリア形成」のまとめからはじまりました。その後、会報の中でも触れられていた、「仕事と子育ての両立の悩みと工夫」「どんな勉強・情報収集をしているか」「子育て中でも大図研を続けていくには」の3点について、参加者で意見交換を行いました。意見交換にあたっては、事前に主催者から送付されたアンケートの回答結果も参考になりました。

2．仕事と子育ての両立の悩みと工夫

まず、参加者の自己紹介が行われました。その後、「コロナ禍での子育て」ということで、小中学校でのオンライン授業やタブレット学習の様子、自宅に子どもがいる中でどのように在宅勤務を行っているのかについて意見交換が行われました。

小中学生のお子様を持つ参加者からは、我が子がオンライン授業やタブレット学習に順応している姿を見て、数年後にはデジタルネイティブたちが大学に入学してくるにあたり、図書館としても彼らに対応していかなくてはならないと感じたという意見が出されました。

また、コロナ禍で在宅勤務が一般的となり、休暇ではなくて在宅勤務という選択肢が増えたという意見があった一方、休暇を取る代わりに在宅勤務というのは違うのではないかという意見が出され、勤務体制の柔軟化や在宅勤務に見合う業務のバランスについて考える機会となりました。

3．どんな勉強・情報収集をしているか

まず、話題になったのは「モチベーションの維持」です。参加者からのアイディアとして、「目標を立てる」「人に宣言する」「仲間を作る」といったことが挙げられました。次にSNSでの効率的な情報収集として、アカウントを分ける、リストを活用するなどのフォルダ分けが効果的というアドバイスがありました。また、新聞の重要性についても複数の参加者から指摘があり、紙の新聞はもちろん、LINEや大学で提供される各大学のトピックのクリッピングなども活用してはどうかという意見がありました。

4．子育て中でも大図研を続けていくには

このセクションではブレイクアウトルームを作成して、1グループ3人程度で意見交換を行い、最後に全体発表を行いました。セミナー等への参加のハードルを下げるために、セミナーの案内の際に、途中抜け可や子どもが画面に映り込んでもOKと明記するのが良いのではないか、またつながりを持ち続けるために、見学会などやわらかめの場があるのも良いという意見がありました。一方で、気軽に参加できる場を設定するということは、場を作る人にとっては負担も大きくなってしまうことが問題だという意見も出ました。

5．最後に

記録者は現在子育て中で、子育てをしている中でもどのように自身のスキルアップをしていけるのか、という観点から、参加者の皆様に刺激をいただきたくて、本分科会に参加しました。参加者の方の意見に共感しながら、

私も実践してみようと、モチベーションに繋げることができました。

ファシリテーターの柿原様、中川様、そして参加者の皆様、どうもありがとうございました。「つながりを持ち続ける」ことが大事、ということで、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

（内田　栞）

第５分科会　学術基盤整備

テーマ：電子資料の予算をもっと獲得するための利用統計の作り方
担当者：田辺浩介，西脇亜由子
参加人数：32名
司会：田辺浩介
報告者・報告タイトル：

1. 岩井雅史「利用統計をどう使ってきたか」
2. 西脇亜由子「予算獲得に向けた利用統計の活用事例（明治大学）」
3. 西脇亜由子「COUNTER統計のおさらい」

配布資料：なし

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により全国の図書館で来館型サービスに制限が設けられたことから、在宅でも利用することができる電子資料への需要が高まったと考えられる。このニーズの高まりに対応するため、電子資料の所蔵が増えた図書館も多いだろう。電子資料は閲覧場所や開館時間の制限を越えられるメリットがある一方、紙の資料と異なり、利用を続けるには継続的に費用がかかる購読型のものも多いため、利用環境を維持するには継続的に予算を確保する必要がある。そのため、予算確保のためのエビデンスともなる利用統計について改めて考えることを目的として第５分科会は開催された。

前半は、信州大学附属図書館と、明治大学図書館から話題提供があり、後半は、参加者全員によるディスカッション形式で進められた。

事例報告１：利用統計をどう使ってきたか
発表者：岩井雅史氏（信州大学附属図書館）

利用統計の活用事例を通して、大学図書館における電子資料統計について、どのような目的で利用しているか、次のとおり整理が行われた。

- 契約の継続・中止の検討材料
- トライアルした資料の契約可否の検討材料
- 未購読タイトル等新規購読対象の選定
- パッケージ契約の購読規模維持のためのタイトル入替をする際の選定材料
- 予算編成

利用目的は、想像していた範囲のことであったが、紙の資料とは異なる視点での統計業務が必要となることを改めて認識することができた。電子資料ならではの指標や統計の仕組み、考え方に対する職員の幅広い理解が必要であることも合わせて確認することができ、後半のディスカッションの前提となる認識の共有ができた。

事例報告２：予算獲得に向けた利用統計の活用事例
発表者：西脇亜由子氏（明治大学図書館）

電子ジャーナルとデータベースの場合、それぞれの資料費の推移と、予算の獲得に向けた利用統計の活用事例についてお話しいただいた。

話題提供の中で、国内データベースの利用統計について非COUNTER（Counting Online Usage of NeTworked Electronic Resources）準拠で独自統計の場合が多く製品間の比較が難しいとの言及があり、その点は日常担当していて同感である。続いて印象

に残ったのは、「効果的で適切な予算配分のために長期的視野も必要」という発言である。復活なき削減は協力を得にくいと感じている。しかしながら、現実としては一方的な削減が進むばかりであり、交渉の難しさを実感している。

利用統計の活用事例の中で、電子資料の統計規格であるCOUNTER Release5についても、詳細な説明があり、「図書館員のためのCOUNTER 5フレンドリーガイド」[i]が紹介された。これは、COUNTERプロジェクトが策定したガイドを、Wiley社がCOUNTERプロジェクトの許諾を得て日本語化し公開したものである。

分科会の後に、紹介された「図書館員のためのCOUNTER 5フレンドリーガイド」を読んでみた。2.2「COUNTERレポートは誰が使うのか」には、世界中の図書館での用途として3つ挙げられている。「契約更新や新たな購入・購読の判断のための情報を提供する」、「図書館とそのリソースの価値について所属教員に情報を与える」、「利用者の行動を理解し、ユーザーエクスペリエンスを改善する」とある。事例報告の2名の発表内容と共通するものがあった。

また、指標やレポートの詳細説明、Release4と5の違い、各種レポートを使用場面のシナリオが記載されており、改めてこのガイドを参照しながらCOUNTERレポートを見てみると新しい気付きがあるのではないかと思う。

後半は、前半の話題提供をふまえ、以下の5つを軸に参加者全員で意見交換を行った。

1. 現在どんな統計データを取っているか
2. どんな統計データを取りたいか、知りたい統計情報は？
3. 図書館員向けに作る利用統計
4. 利用者向けに作る利用統計
5. 上司・経営陣向けに作る利用統計

音声での議論に加え、zoomのチャット機能やGoogleDocsに意見を書き込む方法を用い、オンラインならではの進行となった。議論が白熱して、時間内で5つの視点すべてを網羅することは難しかったが、特に印象に残った意見を以下に列挙する。

- 電子資料のアクセス統計は粒度を揃えるのが現状難しい。
- COUNTERも万能ではない。誤差について指摘した論文もある。
- 国内ベンダーの統計だけでも標準化されないか。

電子資料の統計を考えるとき、国内製品と海外製品の違い、統計の粒度や精度、実務上の負担の問題、予算削減の問題等、様々な要素・指標が関係してくるが、統計は一定の基準のもとに多くの機関が継続して収集、分析して意味を持つものである。

その意味で、現状では各機関、担当者間でも状況に大きな差異があり、また、日本図書館協会の調査や学術情報基盤実態調査等の各種調査においても、電子資料の利用統計は求められるに至っていないことからも、標準化することは難しいのだろう。このあたりが統一されてこない限り、統計管理は実務負担が多い割に、活用が難しい状況が続くのではないだろうか。

（坂本里栄）

[i] WILEY ONLINE LIBRARY 日本語トレーニングハブ. COUNTER. ”図書館員のためのCOUNTER5フレンドリーガイド”. Wiley Online Library, 2021, 入手先, https://www.wiley.com/customer-success/wiley-online-library/%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E5%93%A1%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AEcounter-5-

%E3%83%95%E3%83%AC%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%AC%E3%82%A4%E3%83%89,（参照2021-09-19）

第６分科会　図書館経営

テーマ：図書館の危機管理：特にコロナ禍への対応について
担当者：赤澤久弥、鈴木正紀
参加人数：20名
司会：鈴木正紀
報告者・報告タイトル
講演
・小陳左和子氏（東北大学附属図書館事務部長）「大学図書館が動き続けるために：災害やコロナ禍に遭遇して」
事例報告
・赤澤久弥（大阪大学附属図書館）「大阪大学附属図書館におけるコロナ禍対応について」
・鈴木正紀（文教大学越谷図書館）「文教大学図書館におけるBCP策定について」
配布資料：
・大学図書館が動き続けるために：災害やコロナ禍に遭遇して
・大阪大学図書館報54（1）；2021.3、ウィズコロナ時代における大阪大学の新・活動基準の目安（令和3年3月1日～3月31日）
・第6分科会参加者事前アンケート（回答まとめ）

はじめに、東北大学の小陳氏から「大学図書館が動き続けるために：災害やコロナ禍に遭遇して」と題し、過去の災害への対応を含めた東北大学での経験について講演があった。過去の災害では、2011年東日本大震災の際は、学内ボランティア組織の支援や、有志団体saveMLAKの仲介により専門会社からマイクロフィルムの復旧作業への支援を受けたほか、全国から公的・私的な各種支援があり、図書館機能を復活させる事ができた。全世界的なコロナ禍のとき、どのような支援ができるかは課題であると話があった。2021年2月の地震の際は、分館で落下防止バーを設置した書架から資料が落下し、防犯カメラの映像で落下後にバーが跳ね上がった事が確認され、業者と改善に取り組んでいるとの事であった。災害対策後も、継続して情報収集を続けていく必要性を感じた。

続いて、コロナ禍における国立大学の状況の説明があった。国立大図書館等の開館状況等の項目を調査し、データをsaveMLAKのホームページにCC0で公開する活動の紹介があった。そのデータから国立大学図書館の開館状況をグラフ化すると、大学図書館の開館状況は大学の方針に影響されることが見えてくる印象を受ける、との報告があった。

コロナ禍における東北大学附属図書館では、大学の行動指針（BCP）にそった図書館のサービスレベルを決め、大学BCPの変更に応じて図書館のサービスも変更してきた旨報告があった。休館中、サービス面では取置貸出・郵送貸出を行ったが、郵送貸出は想定より利用が少なく、申込に書誌を特定する必要があるためと推察される。この意味では、東京学芸大学デジタル書架ギャラリーはよい取り組みであると紹介があった。また、総長・理事から、学生のメンタル面を考慮し、図書館が安全・安心に過ごせる場所とアピールし、他施設の一歩先を行ってほしいとの要請があり、積極的に協力した。Go to図書館キャンペーンは、2020年9月下旬からガイダンスや講習会をキャンペーンという形で学生にアピールした。一方、大学はサイバー空間とリアル空間のハイブリッド環境を作る方針を出し、図書館もその方向にも力を入れた。電子ブックの計画的購入、オンライン教育・学習支援のほか、貴重資料のリアルな展示とオンライン講演会、ゲーム内での利用等、オンラインで貴重資料が利用できるよう取り組んで

きたとの報告があった。

まとめに、大学図書館が動き続けるためには、大学の状況に対応しつつ、図書館の方針も打ち出し、方針の変更を恐れない事、また、行動の記録を残し経験を財産にしていく事が大切であるとの話があった。

次に、事例報告2件があった。大阪大学の赤澤氏からは、図書館報に掲載された2020年のキャンパス移転、コロナ禍の中での附属図書館の取り組みについて報告があった。TAによるオンラインの講習会・学習相談は、コロナ禍を契機にオンライン化が実現された部分もある、との話だった。大学の活動基準への対応では、図書館の項目が活動基準から今年4月に外れたが、開館の方針等は、大学の安全管理部門と連絡を取り決定しているとの報告があった。

文教大学の鈴木氏からは、図書館のBCP設定の事例報告があった。2020年はその時々の判断を行っていたが、今年4月に大学のガイドラインが出たのを契機に図書館でBCPの検討を行い、7月に確定、この9月に公開する事になった。館毎の判断も尊重するため、裁量範囲を持った設定にしているとのことである。

その後、事前アンケートの結果を基に、感染予防策や閲覧席の利用方法等の全体的な傾向について紹介があった。

最後に、意見交換が行われ、SNSを使った広報や、平時の郵送貸出、換気とカビ等について闊達な意見交換が行われた。

（福田亜紀子）

第7分科会　図書館建築・デザイン

テーマ：地域文化を育む図書館建築と図書館の役割
担当者：吉田弥生、中島慶子
参加人数：16名
司会：吉田弥生
報告者・タイトル：以下のとおり。
配布資料：なし

1．講演「地域文化を育む図書館建築と図書館の役割」

講師：渡部幹雄氏（和歌山大学名誉教授　元和歌山大学図書館長）

まず、渡部氏ご自身の現在に至るまでの活動を、以下4つの時期に区切って話された。
①図書館づくりの萌芽期（22歳まで）
②模索期（44歳まで）
③展開期（66歳まで）
④総括期（現在）

渡部氏の図書館づくりの原点は、恩師との出会いを通じて、地域の文化向上をめざす志が芽生えたことに始まる。大学を卒業された後、公民館勤務を経て大分県緒方町立図書館、長崎県森山町立図書館に勤務され、地元産の木材を用いた図書館家具の設計、掘り炬燵の空間のある木造建築の図書館づくりの様々な実践を通じて、地域と図書館の結びつきを重視することが大切であることに至った。

その後、九州での様々な実践を通して明らかになった点の応用としての展開期を迎えることになる。滋賀県愛知川町立図書館の初代図書館長として、図書館が地域の景観に溶け込むように瓦屋根を建物に取り入れ、水の街である自然環境に溶け込むようにビオトープを導入し、本の広場、人の広場のように人々の出会いの場となるような空間を設えるなどの実績を残された。

公共図書館長から和歌山大学に移られてからは地域貢献を謳う大学の図書館長として、地域資源を活かす取り組みを行い、展示室（ギャラリー）を設置された。

今までの図書館の立ち上げに際して、多くの国内外の優れた図書館視察をされた中でも、とりわけ印象的な事例を紹介していただいた。

例えば、イギリスの大学の事例として、館内を色で役割（機能）を区分する、アメリカ

の大学の事例として、吹抜を改修し2階以上の空間をガラスで防音することでゾーニングの工夫をしている様子などをスライド写真で見ることができた。

現在は大分県由布市にて、古民家をリノベーションした「由布の里自由大学」（以下、「自由大学」）の活動を実践されている。建物の内装や家具に地元産の杉材を用い、付属図書館と宿泊施設「B＆B由布」を併設、付属図書館には閲覧室はじめ書庫を設置、蔵書は地域資料と大学の教養レベルの資料を揃えている。

自由大学の役割として、①高等教育の機会の橋渡し、②文化での地域づくり、③空き家対策、④狭隘化する都会の資料保存事情の解消などが挙げられ、今後の展開としてギャラリー、上映会、家具販売、ホテル事業、DIY実践の場、セミナーハウスの構想をお話しいただいた。

最後に、大学図書館員に期待することとして、大学図書館は利用者である学生が多感な頃に出会う図書館であり、生涯学習への橋渡しとして公共図書館と結ぶ役割を担ってほしいことが述べられた。

2. 質疑応答

地域の方との地域資料の寄贈を通じた交流に関する質問や、自由大学運営についての質問、学校図書館勤務の方からは周りを味方につけるための質問などがあった。

3. 感想

今回もZoom開催であったが、画面越しに実際の付属図書館内部の様子を交えながらお話いただけた。今後、図書館関係団体の合宿などで自由大学を活用できれば、図書館に対する渡部氏の熱い思いと実践を共有する絶好の機会となるだろう。

（中島慶子）

第8分科会　出版・流通

テーマ：電子ブックの出版状況の変化と利活用

担当者：井上昌彦、北川正路

参加人数：28名

司会：北川正路

報告者・報告タイトル

1. 西田和之「紀伊國屋書店図書館向け電子書籍サービスの現在」
2. 川口達也「Maruzen eBook Libraryの利活用について」
3. 北川正路「国内大学図書館における電子ブックの導入（事例報告を交えて）」

配布資料：なし

2000年代後半から、国内の大学図書館において電子ブックの導入が進められている。当初は、国外出版社の提供する英語電子ブックの導入が中心であったが、その後、大学図書館向けの日本語電子ブック製品の種類も増加してきた。さらに、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う遠隔授業、在宅学習への対応として電子ブックの活用が求められたことも追い風となり、ここ数年で国内大学図書館における電子ブックの導入が加速した。

一方、電子ブックに関する大学図書館からの報告は少なく、新たに導入を計画したり、利用促進を考えたりする際、他館の事例を幅広く知ることができないのが現状である。

そのため、本分科会では、とくに日本語電子ブックを対象として、電子ブック特有の機能、導入•利用方法について説明を受けた後、大学内における利活用に関して討論をする内容とした。なお、討論の参考となるよう、事前に参加者に電子ブックの利活用に関するアンケート調査を実施した。

分科会では、まず、電子ブック提供書店2社から、電子ブックの機能、利用方法について、それぞれが扱う製品を例として説明があった。オンライン選書、試読、読み上げ、データベースとの連携、同時アクセス数増加など、電子形態だから可能となる機能を把握す

ることができ、今後の幅広い利用のあり方を考えるためのきっかけとなった。

続いて、事前アンケートにて参加者から挙げられたテーマについての討論に移った。とくに利用促進のテーマに時間が割かれた。学生が電子ブックの存在に気付いて、活用するようになるための方策に関して、図書館単独のほか、教員との連携、業者の協力による対応例の紹介があり、経験に基づいた討論をすることができた。電子ブックの選書方針、予算管理に関するテーマも取り上げたが、各館での事情が多様であるため、事例の紹介だけで予定していた時間の大半を占め、問題解決ための十分な討論まで発展させることができなかった。

今回の分科会では、参加者から、他館の担当者から生の声を聞くことができ新しい発見があった、との感想があった。電子ブックの利活用に関しては、更なる討論の機会が必要であることを感じた。

（北川正路）

協賛企業企画
9月19日（日）　13:00～13:45

協賛企業のうち3社からプレゼンテーションがあった。

1）株式会社カーリル

「図書館をもっと楽しく。カーリルの最新の取り組みについてのご紹介。」

2）株式会社サンメディア

「ディスカバリーサービスを通じた電子ブックの提供」

3）日本事務器株式会社

「大学生の読書記録・読書レビューに関する新サービス企画のご案内」

シンポジウム
「アフターコロナの大学図書館」
-アフターコロナ社会の情報提供を考える-
9月20日（月・祝）9:30～12:00

【概　要】

2020年初頭より続く新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大は、大学図書館に新たな課題を突き付けました。学習・研究の場としての機能を拡充させてきた大学図書館は、インターネット等を利用して提供する図書館サービスの内容を、これまで以上に拡充することが求められるようになりました。

今回のシンポジウムの目的は、大学図書館の内と外から、あらためてその役割について検証と提言をいただき、大学図書館の役割を改めて見つめ直していただくことです。

「『アフター』の前にあるもの」

Independent Librarian　小嶋 智美

「新型コロナウイルス感染拡大で突きつけられた課題」は、もしかしたらこれまでの大学図書館の活動によって蓄積されたものが、たまたま感染拡大によってあらわになった「様々な課題」、コロナ以前からあった学生・教職員の希望を加速したものにすぎないのではないか、という問題提起から、司書を含む情報サービス専門職による情報の「発信」と「受信」のあり方について改めて再考する必要があるのではないか、という主張が展開されました。その上で、個人の発言や、自分が同意する考えのみに流されないように心がけ、不確かな情報・煽情的な情報を安易にシェアしないようにすることが大切であり、個々人の活動が、未来につながる「協働知」の生産につながっていることをしっかり意識しなければならない、という主張で結ばれました。

会場からは小嶋さんの勤務経験から利用者

とのコミュニケーションに関する事例や情報発信についての質問が寄せられました。

「大学生協がすすめる電子書籍を使った学びのご紹介」

生活協同組合連合会大学生協事業連合
勉学研究事業部部長　鷲嶺 奈緒子

大学生協が展開する電子書籍・教科書を中心とする事業である「DECS（Digital Education Contents Supportデックス）」について紹介されました。大学生協オリジナルの電子書籍ビューアであるDECSアプリを用いた「学びの総合提案」、アプリ機能の詳細、大学生協としての今後の展望についての説明、コロナ禍の中で行われる授業について寄せられている教員、学生からの要望、そして実際にDECSを導入した大学の事例も紹介されました。

参加者からは、出版社とのやりとりや、利用データのログ提供に関すること、価格体系、今後の機関版へ提供の展望についての質問がありました。

「大学図書館の役割をあらためて考える」

千葉大学附属図書館　磯本 善男

千葉大学を中心としたコロナ渦中の大学図書館の対応事例と、コロナ禍により改めてその重要性が確認された電子資料の在り方について発表されました。電子資料はただ購入するだけでなく、可視化やキャンパス外からも利用できる環境を整えることが重要ですが、それを実現するには図書館だけの力では難しく、大学の他の部署、他機関との連携をこれまで以上に進めていく必要がある、という点を強調されました。

参加者からは、他部署との連携の事例についての質問が寄せられました。

【まとめ】

3名の発表の後、参加者とのディスカッションが展開され、最後はコーディネーターの「新型コロナウイルス感染拡大によって、これまで停滞していた電子化等の取組が進展したのは間違いなく、場所としての図書館の在り方も引き続き考えていく必要がある」という言葉で今回のシンポジウムは幕を閉じました。

（和知　剛・磯本善男）

自主企画

オンライン地酒の会

日　時：9月19日（日）　17:30 〜 19:00
参加者：14名
担当者：磯本善男、中島慶子
内容：

今回初のオンライン形式による地酒の会を開催するにあたり、参加者の方には各地の地酒や特産品などを1品以上ご用意いただき、オンラインで紹介していただくとともに、各地の魅力や職場の図書館の魅力などを自由に語っていただく場となることを企図した。

1．自己紹介および地酒・特産品等紹介

2日目午後の課題別分科会終了後、定刻に始まった。まずは参加者の皆さんの簡単な自己紹介の後、各々で思い思いに準備された各地の地酒や地元名産品はじめ、蔵元のお話や名勝なども交えながら紹介していただいた。また在住在勤の地域だけでなく、コロナ禍のご時世もあり、蔵元はじめとする生産者の応援で全国からの取り寄せ情報も紹介された。参加者は以前のリアル地酒の会でも顔なじみの方が多かったため、いろいろな質問やコメントなども積極的に飛び出し、終始和やかな雰囲気を醸しながら進行された。

2．参加者特典（のようなもの）

オンラインのメリットの一つ、チャットに書き込むことで情報共有が容易にできる点を活かし、今回紹介された情報をExcelでカテゴリー別（地酒、地域名物・特産品など）にまとめ、後日参加者全員でシェアする試みを行った。尤も、現時点では試作段階なので、今後も続ける際は改良して活用されることが望ましい。

3．結び

今回、開催時間を最長90分、参加者を最大20名で想定した。オンラインであれリアルであれ、お互いに顔を合わせて飲みながら語り合う場は、大図研の貴重な伝統企画として残してゆきたい。地酒の会、弥栄！

（中島慶子）

次回大会へのご要望お聞きします

日　時：9月20日（月・祝）13:00 〜 14:00
参加者：11名
担当者：磯本善男
内容：

この自主企画は、大会3日目のシンポジウム終了後に開催されました。この企画は実行委員でもある私が提案してものです。大会への感想や意見はアンケートという形でいただいてきましたが、これまで大会実行委員を数年間経験する中で、参加者の方の声を直接聞く機会は少なかったので、この企画を立てました。企画を立てた後、広報に着手するのが遅れてしまいましたが、それでも実行委員も含め、11名の方に参加していただきました。

当日は、開催形態、プログラム、運営方式等について積極的な意見交換がされました。やはり中心となったのは開催形態についてでした。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で全体会からオンラインの開催となり、次回大会もオンラインで開催することが決まっています。オンラインでの開催は全国のどこからでも参加できますが、参加者が直接顔を合わせることができません。オンラインと実地開催を併せたハイブリット型で、という意見も出されましたが、大会運営、特に会員総会の運営が難しくなるとの指摘もありました。2013年の第44回つくば大会以降の全国大会は実行委員会形式で運営されており、実行委員の確保も大切になります。実地開催、オンライン開催ともに長所､短所がありますので、新型コロナウィルス感染症の収束後はDOCと全国大会を実地とオンラインの交互に開催しては、というアイデアも出ました。また、記念講演やシンポジウム等の一部プログラムは配信を行っても良いのでは、という意見も出ました。

まだ取りまとめの途中ではありますが、今回いただいた要望はしっかり次の実行委員にお届けします。

（磯本善男）

交流会
9月18日（土）　18:30 〜 19:30

全国大会1日目の最後のプログラムは懇親会というのがこれまでの実地開催の通例でした｡新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、前回の第51回大会からオンライン開催となり、前大会では懇親会は開催されませんでした。今大会はオンライン開催でも可能な限り従前と同様のプログラムを開催する、ということで準備を進めてきました。オンライン開催ですので、飲食を提供しての「懇親会」ではなく「交流会」という形で実施することとしました。各自で用意していただいたものは飲食自由という形とし、開催時間は従来90分のことが多かったですが、今大会は60分としました。

当日の進行は､呑海会長の挨拶から始まり、各地域・研究グループの紹介の後に4つのブ

レイクアウトルームに分かれてのフリートークという流れでした。Zoomでの交流会は初めてで全てが手探りの運営でした。グループ紹介は時間通りに進行するか、ブレイクアウトルームを上手く機能させることはできるのか、等々不安ばかりでしたが、参加の皆様のご協力により、それらは全て杞憂に終わりました。フリートークについては、最初の振り分け以降はルーム間の移動はできるようにしていたので、一部に人数の偏りがあったようですが、どのルームも非常に盛り上がっていたようです。予定の19:30を過ぎても交流が続いていた所もありました。一応、30分程度の延長は見込んでいましたが、次回大会からは最初から90分～120分に設定しても良いかもしれません。

オンラインの交流会は参加、退室をある程度は自由にできる事がメリットになると思います。次回の全国大会もオンラインでの開催となります。今回は40名近い方に参加していただきましたが、次の大会では更に参加者が増えることを願います。

（磯本善男）

第52回全国大会　協賛企業・団体一覧

今回の全国大会開催にあたり、以下の企業・団体様からご協賛をいただきました（50音順）。ここに深く感謝申し上げます。

EBSCO Information Services Japan株式会社
NPO医学中央雑誌刊行会
株式会社カーリル
株式会社紀伊國屋書店
株式会社規文堂
株式会社サンメディア
株式会社シー・エム・エス
株式会社ソフエル
日外アソシエーツ株式会社
日本事務器株式会社
日本ファイリング株式会社
株式会社ネットアドバンス
有限会社藤井洋書
株式会社メタ・インフォ

大学図書館研究会 第52回全国大会
会員総会資料

目　次

【第1号議案】第51期（2020/2021年度）活動報告

1. 活動日誌
2. 地域グループ報告
3. 研究グループ報告
4. 常任委員会等
5. 常任委員会等の活動報告

【第2号議案】第51期（2020/2021年度）決算報告・会計監査報告

1. 2020/2021年度一般財政決算報告
2. 2020/2021年度大会基金決算報告
3. 2020/2021年度出版財政決算報告
4. 2020/2021年度五十周年事業基金報告
5. 2020/2021年度会計監査報告

【第3号議案】第52期（2021/2022年度）活動計画案

【第4号議案】第52期（2021/2022年度）予算案

6. 2021/2022年度一般財政予算案
7. 2021/2022年度大会基金予算案
8. 2021/2022年度出版財政予算案
9. 2021/2022年度五十周年事業基金予算案

【第5号議案】第52期（2021/2022年度）役員案

大学図書館研究会の会則改正（案）

綱領，ガイドライン，ミッション・ステートメントの取り扱いについて（案）

※この資料では，以下の省略形を用いる。

正式名称	省略形
大学図書館研究会（旧称含む）	大図研
大学図書館研究会報『大学の図書館』	会報
大学図書館研究会誌	会誌
ワーキンググループ	WG

【第１号議案】
第51期（2020/2021年度）活動報告

全国委員会，常任委員会，会計監査について，下記のように特記以外全てオンライン（Zoom）で実施した。

1．活動日誌

〔2020年〕
7月6日（月）
　会報2020年6月号発送
7月19日（日）
　2019/2020年度 第10回常任委員会
8月1日（日）
　会計監査
8月27日（木）
　会報2020年7月号発送
8月30日（日）
　2019/2020年度 第11回常任委員会
9月1日（火）
　会報2020年8月号発送
9月6日（日）
　2019/2020年度 第12回常任委員会
9月13日（日）
　2019/2020年度 第13回常任委員会
9月29日（火）
　会報2020年9月号発送
10月10日（土）
　2019/2020年度 第6回全国委員会
10月10日（土）-10月11日（日）
　第51回全国大会
10月10日（土）
　第1回全国委員会
11月14日（土）
　会報2020年10月号発送
11月22日（日）
　第1回常任委員会
12月3日（木）
　会報2020年11月号発送
12月13日（日）
　第2回常任委員会
12月20日（日）
　第2回全国委員会

〔2021年〕
1月11日（月祝）
　第3回常任委員会
1月28日（木）
　会報2020年12月号発送
2月7日（日）
　第4回常任委員会
2月10日（水）-2月17日（水）
　第3回全国委員会
　会場：メール（フォーム）
2月22日（月）
　会報2021年1月号発送
2月25日（木）
　会報2021年2月号発送
3月7日（月）
　第5回常任委員会
3月20日（土祝）
　第4回全国委員会
4月9日（金）
　会報2021年3月号発送
4月18日（日）
　第6回常任委員会
5月12日（水）
　会報2021年4月号発送
5月23日（日）
　第7回常任委員会
6月7日（月）
　会報2021年5月号発送
6月12日（土）-6月19日（日）
　第5回全国委員会
　会場：メール（フォーム）

6月27日（日）
　第8回常任委員会

2. 地域グループ報告

　各項目の説明は以下のとおり。
①　2021年6月30日現在の会員数
②　運営体制
③　例会・研究会・見学会等の活動報告
④　グループ報の発行
⑤　最近の総会等の報告
⑥　その他，特記事項

2.1　北海道地域グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 10名
②　運営体制
　グループ長　磯本 善男（千葉大学）
　全国委員　得能 由貴（北海道大学）
　会　　計　中條 将喜（北海道大学）
③　例会・研究会・見学会等の活動報告
　名　　称　2020/2021年度第1回定例会
　日　　時　2020年11月15日（日）
　　13:00-15:00
　会　　場　オンライン（Ｚｏｏｍ）
　内　　容　2020年の全国大会報告・会報特集のテーマ選定など
　参加者数　7名

　名　　称　2020/2021年度第2回定例会
　日　　時　2021年5月4日（火・祝）
　　15:00-17:30
　会　　場　オンライン（Ｚｏｏｍ）
　内　　容　2020年12月，2021年3月の全国委員会報告など
　参加者数　6名
④　グループ報の発行 なし
⑤　最近の総会等の報告 なし
⑥　その他，特記事項 なし

2.2　埼玉地域グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 15名
②　運営体制
　全国委員　鈴木 正紀（文教大学）
　会　　計　浜田 賢一（文教大学）
③　例会・研究会・見学会等の活動報告
　名　　称　関東地域グループ合同例会
　日　　時　2021年1月23日（土）
　　14:30-16:30
　会　　場　オンライン（Zoom）
　講　　師　蓮沼 龍子氏（国際交流基金ケルン日本文化会館図書館）
　内　　容　講演会「ドイツの日本専門図書館の取り組み：日独交流160年に寄せて」
　参加者数　54名
　備　　考　埼玉・千葉・東京地域グループ共催
④　グループ報の発行 なし
⑤　最近の総会等の報告 なし
⑥　その他，特記事項
　地域グループメンバーによる検討の結果，2020/2021年度を以って解散することとした。

2.3　千葉地域グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 12名
②　運営体制
　地域グループの長　小笠原 玲子（淑徳大学）
　全国委員　加藤 晃一（新潟大学）
　会　　計　小笠原 玲子（淑徳大学）
　広　　報　内山 光子（日本大学）
　研　　究　友田 暁子（千葉県立中央博物館）
③　例会・研究会・見学会等の活動報告
　名　　称　関東地域グループ合同例会
　日　　時　2021年1月23日（土）
　　14:30-16:30
　会　　場　オンライン（Zoom）
　講　　師　蓮沼 龍子氏（国際交流基金ケルン日本文化会館図書館）
　内　　容　講演会「ドイツの日本専門図書

館の取り組み：日独交流160年に寄せて」
参加者数　54名
備　　考　埼玉・千葉・東京地域グループ共催

④　グループ報の発行 なし
⑤　最近の総会等の報告 なし
⑥　その他，特記事項 なし

2.4　東京地域グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 88名
②　運営体制

地域グループの長	立原 ゆり
全国委員	下山 朋幸
運営委員	青山 史絵
	安達 修介
	高瀬 洋子
	松原 恵
	山口 友里子
オブザーバ	石津 朋之
	上村 順一
	澤木 恵
	嶺井 尚子

③　例会・研究会・見学会等の活動報告

名　　称　第1回情報交換会
日　　時　2020年9月26日（土）
　　10:30-12:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　好きな本の紹介，コロナ禍における学生スタッフ等との協働について，他
参加者数　14名

名　　称　第2回情報交換会
日　　時　2021年1月11日（月・祝）
　　14:30-16:00
会　　場　オンライン（Zoom）
話題提供　高橋 菜奈子氏（東京学芸大学）
内　　容　「学芸大デジタル書架ギャラリー」について
参加者数　20名

名　　称　関東地域グループ合同例会
日　　時　2021年1月23日（土）
　　17:00-19:00
会　　場　オンライン（Zoom）
講　　師　蓮沼 龍子氏（国際交流基金 ケルン日本文化会館図書館）
内　　容　講演会「ドイツの日本専門図書館の取り組み：日独交流160年に寄せて」
参加者数　54名
備　　考　埼玉・千葉・東京地域グループ共催

名　　称　第3回情報交換会
日　　時　2021年5月23日（日）
　　10:30-12:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　情報収集の方法
参加者数　22名

名　　称　第1回例会
日　　時　2021年6月19日（土）
　　10:30-12:00
会　　場　オンライン（Zoom）
講　　師　吉場 千絵氏（神奈川大学図書館），小池 孝昌氏（神奈川大学図書館），斎藤 未夏氏（東京大学附属図書館），金子 芙弥氏（九州大学附属図書館/JUSTICE事務局）
内　　容　講演会「神奈川大学みなとみらい図書館，九州大学中央図書館オンライン見学会」
参加者数　134名

④　グループ報の発行

回　　数　4回
巻　　号　249号-252号
発行月日　2020年11月-2021年6月

⑤　最近の総会等の報告
名　　称　東京地域グループ総会
日　　時　2020年8月8日（土）
15:00-16:00
会　　場　オンライン（Zoom）
参加者数　11名
内　　容
- 活動総括，2019/2020年度決算報告・会計監査報告
- 活動方針，2020/2021年度予算案，2020/2021年度地域グループ運営委員会及び会計監査人について
- 終了後，情報交換会を開催

⑥　その他，特記事項
- 会報『大学の図書館』2021年5月号の特集「それぞれのDX（デジタルトランスフォーメーション）」の企画編集を担当した。
- 『大学図書館問題研究会誌』第46号（冊子）を，東京地域グループ会員の希望者に無料配布した。

2.5　東海地域グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 23名
②　運営体制
地域グループ長　中島 慶子
全 国 委 員　中川 恵理子
事　務　局　前田 勝典
財　　政　森川 雅人
広　　報　石田 信
③　例会・研究会・見学会等の活動報告 なし
④　グループ報の発行 なし
⑤　最近の総会等の報告
名　　称　第52回東海地域グループ大会
日　　時　2020年9月26日（土）
14:30-15:30
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容
- 2019/2020年度総括・決算
- 2020/2021年度活動方針・予算・大学図書館問題研究会東海地域グループ役員について
- 大学図書館問題研究会東海地域グループ規約の改正について
- 大会後，情報交換会を行った。

参加者数　Zoom参加者（7名），委任（5名）
備　　考　大会後，情報交換会を行った
⑥　その他，特記事項 なし

2.6　京都地域グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 51名
②　運営体制
グループ代表　野間口 真裕
全 国 委 員　安東 正玄
運 営 担 当　内田 栞
坂本 拓
長坂 和茂
原 健治
藤谷 篤
山形 知実
山上 朋宏
山下 ユミ
若狭 あや
鷲津 綾乃
③　例会・研究会・見学会等の活動報告
名　　称　大図研京都ワンディセミナー「Go to レファレンス〜ウィズコロナ時代におけるレファレンスの在り方を再定義してみませんか〜」
日　　時　2020年11月14日（土）
13:00-16:00
会　　場　オンライン（Zoom）
講　　師　矢崎 美香氏（九州女子大学 准教授）
内　　容
- リモート環境下でのレファレンス〜レファレンス・イ

ンタビューのコツ
- レファレンスの体系的な構築に向けて～レファレンス・カルテの導入

参加者数　30名

名　　称　関西3地域グループ合同例会「「Alma導入の苦労話を聞こう」－体験者が語る導入のポイントとは－」
日　　時　2021年1月10日（日）13:00-15:00
会　　場　オンライン（Zoom）
講　　師　飯野 勝則氏（佛教大学図書館専門員）
内　　容　Alma導入の経過や導入後の状況について伺った。
参加者数　43名
備　　考　京都・大阪・兵庫地域グループ共催

名　　称　大学図書館研究会京都地域グループDXセミナー「アフターコロナ時代の出版と図書館」
日　　時　2021年2月13日（土）-2021年2月22日（月）12:00 事前コンテンツ公開と質問受付
2021年2月23日（火・祝）10:00-11:30 講師によるライブセッション
会　　場　オンライン（Zoom）
講　　師　湯浅 俊彦氏（追手門学院大学教授）
内　　容　事前に講演内容をネットで視聴していただき，質問を後日受付け，その質問をもとにライブ配信の中で講師の先生と質疑を繰り広げた。
参加者数　27名

④　グループ報の発行
回　　数　5回
巻　　号　337-341
発行月日　2020年8月15日-2020年4月15日

⑤　最近の総会等の報告 なし
⑥　その他，特記事項 なし

2.7　大阪地域グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 30名
②　運営体制
地域グループの長　小村 愛美
全国委員　吉田 弥生
事務局　伊賀 由紀子
会計　吉田 弥生
地域グループ委員　小山 荘太郎

③　例会・研究会・見学会等の活動報告
名　　称　8月例会「大学図書館などでの新型コロナ対応情報交換会②電子ブックを中心に」
日　　時　2020年8月29日（土）14:00-16:00
会　　場　オンライン（Zoom）
参加者数　14名

名　　称　11月例会「第51回全国大会報告会」
日　　時　2020年11月3日（火・祝）13:30-17:00
会　　場　大阪市立総合生涯学習センター第3研修室
参加者数　6名

名　　称　関西3地域グループ合同例会「「Alma導入の苦労話を聞こう」－体験者が語る導入のポイントとは－」
日　　時　2021年1月10日（日）13:00-15:00
会　　場　オンライン（Zoom）
講　　師　飯野 勝則氏（佛教大学図書館

専門員）
内　　容　Alma導入の経過や導入後の状況について伺った。
参加者数　43人
備　　考　京都・大阪・兵庫地域グループ共催

名　　称　4月例会「オンライン授業と著作権」
日　　時　2021年4月24日（土）14:00-16:30
会　　場　オンライン（Zoom）
講　　師　和知 剛 氏（郡山女子大学），川﨑 千加氏（大阪女学院大学・大阪女学院短期大学）
参加者数　32名

④　グループ報の発行
回　　数　1回
巻　　号　No. 5
発行月日　2020年8月16日

⑤　最近の総会等の報告
名　　称　第5回地域グループ総会
日　　時　2020年8月29日（土）16:30-17:30
会　　場　オンライン（Zoom）
参加者数　6名（この他に委任状8名）
内　　容
- 2019年度活動報告，決算報告・監査報告
- 2020年度役員案および活動方針案，予算案についての協議
- 大阪地域グループ会則の一部改正についての協議

⑥　その他，特記事項 なし

2.8　兵庫地域グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 20名

②　運営体制
地域グループ長　森藤 惠子
全 国 委 員　井上 昌彦
財 政 部 長　井上 俊子
編 集 部 長　六車 彩都子
会 計 監 査　杉原 奈美

③　例会・研究会・見学会等の活動報告

名　　称　12月例会「オンライン座談会・2020年の大学図書館を振り返る」
日　　時　2020年12月29日（火）19：30-21：00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　コロナ禍の1年を，多角的な話題で振り返った。
参加者数　10名

名　　称　関西3地域グループ合同例会「「Alma導入の苦労話を聞こう」－体験者が語る導入のポイントとは－」
日　　時　2021年1月10日（日）13:00-15:00
会　　場　オンライン（Zoom）
講　　師　飯野 勝則氏（佛教大学図書館専門員）
内　　容　Alma導入の経過や導入後の状況について伺った。
参加者数　43人（うち兵庫地域グループから5名）
備　　考　京都・大阪・兵庫地域グループ共催

名　　称　5月例会「近況報告会」
日　　時　2021年5月29日（土）14:00-16:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　各参加者の担当業務や近況・課題などを報告しあいながら，情報交換を行った。幅広い話題について議論され，意義深い時間となった。
参加者数　7名

④　グループ報の発行 なし
⑤　最近の総会等の報告
名　　称　第42回地域グループ大会
日　　時　2020年11月29日（日）
　　13：00-15：30
会　　場　オンライン開催
内　　容　2019/2020年度の振り返りと，2020/2021年度活動方針について協議した。終了後，有志によるオンライン交流会を行った。
参加者数　10名（この他に委任状6名）
⑥　その他，特記事項
➢　兵庫地域グループMLにて情報交換，イベント案内などを随時行った

2.9　広島地域グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 19名
②　運営体制

地域グループの長	辻 水衣（福山市立大学）
副代表	沖政 裕治（広島大学）
全国委員	楫 幸子（安田女子大学）
事務局長	沖政 裕治（広島大学）
事務局員	山下 真佑美（広島大学）
会計	山下 真佑美（広島大学）
会計監査	津村 光洋（広島大学）
	西川 英治（元広島経済大学）
編集長	石井 美絵（広島文教大学）
編集委員	片山 智恵美（広島都市学園大学）
	北井 由香（島根県立大学）
	込山 祐佳里（広島大学）
	永友 恵（広島大学）

③　例会・研究会・見学会等の活動報告
名　　称　7月情報交換会
日　　時　2020年7月18日（土）
　　15:15-17:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　近況報告及び各大学のコロナ対応について
参加者数　16名

名　　称　10月研究会
日　　時　2020年10月31日（土）
　　14:00-17:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　オンラインビブリオバトル
参加者数　7名

名　　称　2月情報交換会
日　　時　2021年2月27日（土）
　　14:00-17:00
会　　場　オンライン（Zoom）
内　　容　図書館のコロナ対策とオンラインの活用
備　　考　10名
④　グループ報の発行
回　　数　3回
巻　　号　227号-229号
　　（電子版No. 38-40）
発行月日　2020年9月14日，
　　2021年1月15日，
　　2021年6月30日
⑤　最近の総会等の報告
名　　称　広島地域グループ総会
日　　時　2020年7月18日（土）
　　13:30-15:00
会　　場　オンライン（Zoom）
参 加 者　12名
内　　容　会計報告，活動報告，予算案，役員選出，次期活動計画
備　　考　終了後，情報交換会を開催
⑥　その他，特記事項 なし

2.10　九州地域グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 34名
②　運営体制
地域グループ長　山下 大輔

全国委員　柿原 友紀
事務局　坂本 里栄
会計　坂本 里栄
企画サポーター　小野 未来子
金子 芙弥
廣田 桂
廣松 亜矢子
会計監査　西村 泰成

③　例会・研究会・見学会等の活動報告 なし
④　グループ報の発行 なし
⑤　最近の総会等の報告 なし
⑥　その他，特記事項
「大学の図書館」2021年7月号の特集編集を担当した。

3. 研究グループ報告

各項目の説明は以下のとおり。
①　2021年6月30日現在の会員数
②　運営体制
③　例会・研究会・見学会等の活動報告
④　グループ報の発行
⑤　最近の総会等の報告
⑥　その他，特記事項

3.1 長期的研究グループ

3.1.1 学術基盤整備研究グループ

①　2021年6月30日現在の会員数 16名
②　運営体制
グループ長　野間口 真裕（京都教育大学）
全国委員　田辺 浩介（物質・材料研究機構）
③　例会・研究会・見学会等の活動報告
名称　オンライン読書会
日時　2020年7月12日（日）-
2021年6月20日（日）
（およそ2週間に1回の頻度で開催）
会場　オンライン（Zoom）
参加人数　毎回4-6名
備考　読書会の題材は以下のとおり。

- 学術情報流通における「書誌多様性」の形成に向けて―行動の呼びかけ―（https://doi.org/10.20736/00001276）
- OCLC Next（https://blog.oclc.org/next/）
  - ➢ The legendary “apple cake” record story
  - ➢ The library 4th is strongest in this one …
  - ➢ LCSH, FAST, and the governance of subject terms
  - ➢ Too much metadata?
  - ➢ The Dewey Decimal Classification needs you!
  - ➢ OCLC and the PCC: changing standards to support changing times
  - ➢ Time-travelinglibrarians, shared print, and being excellent to each other
  - ➢ Getting a million dollar digital collection grant in six easy steps
  - ➢ Three ways to engage your faculty using digital collections
  - ➢ How do you assess the value of e-resources?
- オープンサイエンス時代の研究者プロフィールサービス―研究活動の可視化のためにやるべきことはなにか？（https://doi.org/10.18919/jkg.71.5_200）
- 大学における研究データポ

リシー策定のためのガイドライン（https://rdm.axies.jp/sig/70/）
④　グループ報の発行 なし
⑤　最近の総会等の報告 なし
⑥　その他，特記事項 なし

3.1.2　地域文化研究グループ
①　2021年6月30日現在の会員数 6名
②　運営体制
グループ長　中島 慶子（豊橋創造大学）
全国委員　中島 慶子（豊橋創造大学）
③　例会・研究会・見学会等の活動報告 なし
④　グループ報の発行 なし
⑤　最近の総会等の報告 なし
⑥　その他，特記事項
- 2021年9月19日午後開催の第52回全国大会課題別第7分科会「図書館建築・デザイン」を大阪地域グループ全国委員と担当予定である。
- 2021/2022年度より研究グループとしての活動を停止する。

3.2　萌芽的研究グループ
今年度，萌芽的研究グループは設置されなかった。

4.　常任委員会等
2021年1月1日から大学図書館問題研究会から大学図書館研究会に改称したことに伴い，関係各所への挨拶状の送付やウェブページの更新などの作業を行った。

常任委員会では，常設の5小委員会（全国大会，研究企画，会報編集，会誌編集，広報），五十周年記念事業関連の2小委員会（記念出版物編集，海外図書館研修ツアー検討），2WG（全国大会，出版・管理），および事務局において会務を行い，各課題に取り組んだ。

小委員会およびWGの長は常任委員が務め，主として常任委員で構成される。また，会務をサポートする運営サポート会員を会員から公募することによって，運営の強化を図っている。

常任委員会の構成，各小委員会，各WGおよび事務局の活動報告は以下のとおりである。

4.1　常任委員会等の体制
4.1.1　常任委員会
委員長（全国委員会委員長）：呑海沙織
副委員長：赤澤久弥，磯本善男，上村順一
全国大会小委員会：磯本，赤澤，上村，中筋知恵[+]，渡邊伸彦[+]
研究企画小委員会：西脇亜由子，小山荘太郎
会報編集小委員会：上村，磯本，北川正路，小山，西脇，和知剛，北海道地域グループ[*]，東京地域グループ[*]，京都地域グループ[*]，大阪地域グループ[*]，兵庫地域グループ[*]，九州地域グループ[*]
会誌編集小委員会:和知，赤澤，北川，小山，運営サポート会員
広報小委員会：中筋[+]，柘植久美子[+]

4.1.2　五十周年記念事業関連小委員会
記念出版物編集小委員会:北川，上村，小山，呑海，運営サポート会員
海外図書館研修ツアー検討小委員会：中筋[+]，呑海，運営サポート会員

4.1.3　WG
全国大会WG：赤澤，磯本，上村
出版・管理WG：呑海，上村，西脇，和知

4.1.4　事務局
事務局長：上村
出版担当：上村，市村省二[*]，清水滋文[*]，瀧桂子[*]，仲尾正司[*]，森永瑞穂[*]
会計担当：上村，澤木恵[+]
会費徴収担当：渡邊[+]，赤澤

組織担当：上村，青山史絵[+]，渡邊[+]
ML担当：磯本[+]

注1）　先頭は，その組織の長
注2）　初出のみ氏名を記載。初出以外は氏のみ記載
注3）　[+]は，特定常任委員
注4）　[*]は，運営サポート会員
注5）　[#]は，オブザーバ

5.　常任委員会等の活動報告

5.1　常任委員会

5.1.1　全国大会小委員会

全国大会小委員会は，毎年開催する全国大会の企画・運営を担当している。

2020/2021年度の全国大会は，第51回全国大会として，去る2020年10月10日（土）から10月10日（日）の2日間，新型コロナウイルス感染症拡大防止のため，初めてオンライン形式で開催した。

全国大会小委員会メンバーと運営サポート会員計18名からなる実行委員会によって企画・運営を行い，合計131名の出席者があった。会員総会のほか，研究発表1題，8つの課題別分科会を実施し，成功裏に終了することができた。また，13社からの企業協賛を得た。

5.1.2　研究企画小委員会

研究企画小委員会は，全国大会以外の研究活動を担当している。

①　大図研オープンカレッジ（DOC）

大図研オープンカレッジ（以下，「DOC」という）は大図研の広報および新入会員の獲得を目的として，参加対象を会員に限定しない方針で行っている。第29回（2020/2021年度）のDOCは，「効果的なガイダンス動画作成講座」というテーマで昨年に引き続きオンライン形式（Zoom）で2021年6月5日（土）14時00分から16時30分まで開催した。講師と演題は以下のとおりである。

- 講演「効果的なガイダンス（動画）作成概論」（講師：宮原俊之氏/帝京大学教授　高等教育開発センター主任・教育方法研究支援室室長）
- 事例紹介「大学院生チューターによる動画作成の取り組み」（講師：石津朋之氏/筑波大学附属図書館 学習支援推進ワーキンググループ）

今回も新型コロナウイルス感染症拡大が続く中のDOC開催となったが，会員・非会員を含め全国から参加があり，参加者数は79名と盛況で今回のテーマに対する関心の高さがうかがえた。なお，イベント管理および参加費集金について，Peatixを使用した。

②　研究グループ

前年度に引き続き「学術基盤整備研究グループ」（長期的）が活動を行った。メンバーは各地の会員から構成され，ウェブ上での情報共有や意見交換が主な活動である。2020年10月開催の第51回全国大会（オンライン）の第5分科会（学術基盤整備）を担当した。また，「地域文化研究グループ」（長期的）が新規に承認された。なお今年度は，萌芽的研究グループについては応募がなかったため，設置されなかった。

③　オンライン交流会

前年度に引き続き、オンライン交流会を実施した。なお今年度については、隔月開催とした。

5.1.3　会報編集小委員会

月刊誌として12回の発行を行った。

2020年7月号以降は以下の特集のもと刊行した。

7　月　号　大学図書館問題研究会第51回全国大会開催要綱[全国大会議案書号]（担当：会報編集小委員会）
8　月　号　農業系・畜産系・獣医系図書館

の魅力
（担当：北海道地域グループ）
9 月 号　どうやってシステムの勉強をしてますか?
（担当：京都地域グループ）
10月号　研究者から図書館に物申す（担当：会報編集小委員会）
11月号　新型コロナウイルス感染防止対策〜現場での取り組み〜
（担当：九州地域グループ）
12月号　大学図書館問題研究会第51回全国大会記録[全国大会記録号]
（担当：会誌編集小委員会）
1 月 号　新しいスタートに当たっての今後の抱負
（担当：会誌編集小委員会）
2 月 号　在宅勤務，何してますか?どうしてますか?
（担当：北海道地域グループ）
3 月 号　新型コロナ禍における書籍との戯れ（担当:会報編集小委員会）
4 月 号　オンラインサービスのこれから
（担当：会報編集小委員会）
5 月 号　それぞれのDX（担当：東京地域グループ）
6 月 号　大学図書館研究会第52回全国大会開催要綱[全国大会議案書号]（担当：会報編集小委員会）

2021年1月号から，会員限定で，デジタル化した会報を大学図書館研究会公式ウェブページから公開している。これに伴い紙版の送付は中止した。

EBSCOへの会報データ提供は全国委員会で承認され，契約書条文について，1箇年のエンバーゴを付与したことに伴い，再度検討中である。

5.1.4　会誌編集小委員会

「大学図書館問題研究会誌」第46号を2020年8月に刊行した。また，その後は引き続き第47号の原稿募集を行った。

5.1.5　広報小委員会

広報小委員会は，ウェブとSNSによる広報を担当した。

- 大図研ウェブ（https://www.daitoken.com/）による情報発信を引き続き行った。大図研ウェブでは，大図研のイベント案内や会報の目次情報と記事データベース，全国委員会や常任委員会，研究活動の記録，刊行物案内等を掲載した。
- 今年度から会員向けに出版物のデジタル頒布が開始されたことにより，発行の都度，Web上に会報PDFを掲載するとともに，会員への掲載通知を行った。
- TwitterやFacebookなどのSNSにて大図研の諸活動の広報を行った。
- 大図研の名称変更や新しいシンボルマークの採用に伴い，大図研ウェブサイトの修正作業を行い，併せてトップページの画像も変更した。

5.2　五十周年記念事業関連小委員会

5.2.1　記念出版物編集小委員会

記念出版物に掲載する各支部・地域グループの歴史，委員変遷に関する原稿について，各地域グループに執筆を依頼し，提出された原稿のとりまとめを進めた。その他，全国大会の一覧，出版物一覧などの記録資料の作成については，新型コロナウイルス感染症拡大により，会報のバックナンバーを所蔵館にて閲覧することできず，作業が遅れている。年度内の発行を計画していたが，記録資料の作成，大図研の沿革に関する文章作成が進んでおらず,発行は次年度への持ち越しとなった。

5.2.2　海外図書館研修ツアー検討小委員会

新型コロナウイルス感染症拡大によりツ

アーの延期を余儀なくされた。

5.2.3　シンボルマーク募集小委員会

新しい大図研のシンボルマークを募集した。その結果として1点の作品を選定し，2020年の全国大会において発表するとともに，会報2020年10月号（39巻12号）に新しいシンボルマークと製作者のコメントを掲載した。

シンボルマーク使用規程の策定に取り組み「大学図書館研究会シンボルマーク使用規程」（2020年12月20日付）としてまとめた。これを以って当小委員会は活動を終了する。

5.3　WG

5.3.1　全国大会WG

全国大会WGは，①全国大会の円滑な運営のための全国大会実行委員会方式の安定的な継続，②全国大会運営マニュアルの整備の2つの目標に基づき活動を行っている。2020/2021年度も，実行委員会方式に拠り，全国大会小委員会及び全国大会実行委員会と連携して活動を行った。また，各種ドキュメントを関係委員で共有の上，全国大会の準備と運営を行うとともに，オンライン開催に係るノウハウを蓄積した。

5.3.2　出版・管理WG

- 会員への出版物（会報および会誌）のデジタル頒布の方針を定め，2021年発行分より実施した。事務局（出版担当）とともに，出版物の印刷・頒布・販売に係るアウトソーシングについて検討を行った。これにより，2021年出版分から印刷・頒布を，2022年出版物から販売をマザータンクへ委託することとなった。
- 2021年以降の出版物の発行・販売について基本方針を定めた。
- 和光大学および文教大学に保管されている出版物の在庫処分に関する方針を定め，作業を実施している。
- 出版物の在庫処分の作業が残っているものの，出版物の印刷・頒布・販売の検討および在庫処理の方針が定まり，本WGの目的は達成できたと考えられるため，今年度をもって活動を終了する。

5.4　事務局

5.4.1　事務局

①　全国委員会の開催

大図研の運営についての諸決定を行うため，5回の全国委員会を開催した。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため，全てオンラインもしくはメールでの会議とした。

②　常任委員会の開催

日常的な業務を遂行するため，ほぼ月に1回，常任委員会を開催した。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため，全てオンラインでの会議とした。

③　大図研出版物の作業手順見直し

引き続き，大図研出版物の製版・印刷・発送作業を見直した。

④　大図研ウェブサーバの見直し

大図研のウェブサーバで，グループ毎にセキュアにコンテンツが制御できる運用方法を検討したが，アカウントの設定等検討課題が発生し，抜本的な見直しはできなかった。

⑤　旧新潟支部の残余金拝受

旧新潟支部の活動費の残余金約25万円を一般会計に繰り入れた。

5.4.2　事務局出版担当

事務局出版担当は，大図研出版部として，大図研出版物の機関･個人への販売を行った。2021年6月30日現在の継続購読数は，会報160件173部，会誌95件103部である。

出版・管理WGと連携し，出版物のデジタル版頒布に伴う対応および販売・販売管理の

アウトソーシングに向けて検討・準備を行った。

5.4.3　事務局会計担当

事務局会計担当は，事務局内の各担当と連携して経理業務を行った。

昨年度に引き続き，業務の合理化を推進し，その一環として伝票類のペーパーレス化を進めた。

5.4.4　事務局会費徴収担当

事務局会費徴収担当は，会費の徴収事務全般のほか，所定スケジュールに沿って，会員の入退会時の会費納入の案内，地域グループへのグループ活動費の振込及び会費長期未納会員の除籍処理等を行った。事務局組織担当および事務局会計担当と連携して業務を遂行した。

また，除籍者の会費納入時の手続きフローを整理するとともに，経費と作業のコスト削減を目的に，次期会費納入依頼をメールにより行うペーパーレス化を試行した。

5.4.5　事務局組織担当

事務局組織担当は，会員の入退会の手続き，会報の発送管理，会員名簿やメーリングリストの維持・管理を行った。

会員に係る入退会の処理フローに則り，迅速な事務処理，各グループとの正確な情報共有に努めた。

会報が不着で戻った際の再送は，今年度よりPDFにより行い，再郵送に係る経費を節約した。

会員情報に変更があった場合の対応，また新規会員募集について，会報に記事を掲載し周知に努めた。

【第２号議案】
第51期（2020/2021年度）決算報告・会計監査報告

【凡例】

- 全ての表の単位は「円」である。
- 差引額の「▲」は，マイナスであることを表す。
- 収入の部の「▲」は，予算額に達していない状態であることを示す。
- 支出の部の「▲」は，予算額以上に支出があった状態であることを示す。
- 備考欄の注記は基本的には決算額に対しての説明である。

1．2020/2021年度一般財政決算報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額（決算－予算）	備考
前年度より繰越	3,377,548	3,377,548	0	
会費	1,610,000	1,900,000	▲ 290,000	注[1]
雑収入	259,858	10,000	249,858	注[2]
出版財政より繰入	771,375	752,600	18,775	注[3]
大会基金より繰入	406,391	0	406,391	
合計	6,425,172	6,040,148	385,024	

【注】
[1] 6月末時点の累計額，322名分。うち，前納（2021/2022年度以降）分145名，当年度（20２０/2021年度）分129名，前年度（2019/2020年度）以前分48名。予算額は会員380名分
[2] 旧新潟支部残金繰入（249,120円），銀行利子，大図研オープンカレッジ参加費（10,709円＝参加費14,500円-Peatixシステム利用料3,581円-振込手数料210円）
[3] 前年度実績で算出。出版部での前年度会報販売収入実績値（868,000円）の1/2である434,000円＋会報発送委託費（出版部負担分）59,400円＋会報送料（出版部負担分）259,200円。余剰分（予算額との差額18,775円）については別途返金済み。〈支出の部〉および出版財政決算をもみよ。

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額（予算－決算）	備考
印刷費	864,777	940,000	75,223	注[4]
発送委託費	118,173	200,000	81,827	注[5]
通信費	728,081	1,150,000	421,919	注[6]
交通費	0	450,000	450,000	注[7]
編集費	15,800	12,000	▲ 3,800	注[8]
助成金	149,000	149,000	0	注[9]
研究活動費	50,000	160,000	110,000	注[10]
会議費	29,238	50,000	20,762	注[11]
消耗品費	16,955	25,000	8,045	注[12]
雑費	24,935	100,000	75,065	注[13]
予備費	0	2,804,148	2,804,148	
次年度繰越	4,428,213	0	▲ 4,428,213	
合計	6,425,172	6,040,148	▲ 385,024	

【注】
[4] 会報2020年6月号-20２1年5月号印刷費（2021年1月号より委託業者変更に伴い，料金改定），会員通知用宛名ラベル・かがみ等印刷費，会議資料等印刷費，購読者向け意向調査印刷費
[5] 会報2020年6月号-20２０年12月号封入費，2021年1月号-2021年5月号宛名ラベル作成費（2021年1月号より委託業者変更に伴い，料金改定）
[6] 会報2020年6月号-20２０年12月号郵送費，2021年1月号-2021年5月号封入発送費（2021年1月号より委託業者変更に伴い，料金改定），会報執筆御礼郵送費，資料送付費，会費納入依頼郵送費，大図研webページ関連費用（サーバレンタル費，ドメインネーム費）
[7] 全国委員会，常任委員会，会計監査ともにすべてオンライン開催のため，交通費発生せず
[8] 会報2020年7月号3校・4校校正および修正費，会報2020年6,8-9,11月号，2021年5月号非会員執筆者謝礼
[9] 地域グループ会員70名以上35,000円×1（東京），地域グループ会員69-30名18,000円×3（京都・大阪・九州），地域グループ会員29-20名12,000円×3（東海・兵庫・広島），地域グループ会員19-5名8,000円×3（北海道・千葉・埼玉）
[10] 長期的研究グループ20,000円×2，大図研オープンカレッジ講師謝礼10,000円
[11] Zoom利用料，Office365利用料（どちらも年払）
[12] 宛名ラベル用紙，印刷用インク費等
[13] 銀行口座振込手数料，出版財政口座への余剰金返金

2. 2020/2021年度大会基金決算報告

100万円を超えた場合は，一般財政へ繰り入れる。

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額（決算－予算）	備考
前年度より繰越	800,000	800,000	0	
一般財政より戻り	606,391	200,000	406,391	注[14]
雑収入	0	0	0	
合計	1,406,391	1,000,000	406,391	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額（予算－決算）	備考
今年度大会会計へ支出	0	0	0	
来年度大会会計へ支出	100,000	350,000	250,000	注[15]
一般財政へ支出	406,391	0	▲406,391	
雑費	0	0	0	
次年度繰越	900,000	650,000	▲250,000	
合計	1,406,391	1,000,000	▲406,391	

【注】
[14] 第51回大会（オンライン）から戻り分
[15] 第52回全国大会の実施形態がオンライン開催へ変更され，必要経費や参加費設定の見直しが生じたため，大会基金からの支出金額も変更

3. 2020/2021年度出版財政決算報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額（決算－予算）	備考
前年度より繰越	3,875,393	3,875,393	0	
刊行物収入	976,916	900,000	76,916	注[16]
広告料収入	0	0	0	
雑収入	18,804	0	18,804	注[17]
合計	4,871,113	4,775,393	95,720	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額（予算－決算）	備考
印刷費	188,497	200,000	11,503	注[18]
通信費	76,925	45,000	▲31,925	注[19]
消耗品費	27,802	40,000	12,198	注[20]
宣伝費	0	10,000	10,000	
会議費	0	10,000	10,000	
雑費	20,095	5,000	▲15,095	注[21]
組入金	434,000	434,000	0	注[22]
会報発送委託費	59,400	59,400	0	注[23]
会報発送費	259,200	259,200	0	注[24]
予備費	0	3,712,793	3,712,793	
次年度繰越	3,805,194	0	▲3,805,194	
合計	4,871,113	4,775,393	▲95,720	

【注】
[16] 会報『大学の図書館』831,700円＋『大学図書館問題研究会誌』145,216円
[17] 組入金過払分（18,775円）の返金，預金利息
[18] 『研究会誌』46号・封筒・はがき印刷代
[19] 請求書・通知・調査票送料など
[20] OPP袋，角印・ゴム印など
[21] 組入金過払分18,775円，振込手数料など
[22] 2019/2020年度会報販売収入実績値（868,000円）の1/2。一般財政に組入
[23] 単価25円×購読分会報発送数180部×12ヶ月分×消費税1.1。一般財政に組入
[24] 単価120円（税込）×購読分会報発送数180部×12ヶ月分。一般財政に組入

4. 2020/2021年度五十周年事業基金報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (決算－予算)	備考
前年度より繰越	955,114	955,114	0	
雑収入	0	0	0	
合計	955,114	955,114	0	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (予算－決算)	備考
記念出版物編集小委員会	0	650,000	650,000	
海外図書館研修ツアー検討小委員会	0	10,000	10,000	
シンボルマーク募集小委員会	59,600	60,000	400	注[25]
次年度繰越	895,514	235,114	▲ 660,400	
合計	955,114	955,114	0	

【注】
[25] シンボルマークレタッチ代，シンボルマーク優秀作品副賞，名称変更に伴う会報表紙デザイン代

5. 2020/2021年度会計監査報告

大学図書館研究会　2020/2021年度　会計監査報告

2020/2021年度一般財政・出版財政に係る決算及び関係書類について監査した結果，いずれも適正に執行されていることを確認しましたので，ご報告いたします。

【監査所見】
オンライン監査に際しては，事前にチェックができるというメリットがある一方で，帳票や信憑書類，財政基盤等に関する説明が示されないままにチェックを行う点で大変煩雑な作業であった。今後は，監査資料と併せて説明資料を提示してほしい。
また，事務局の負担を軽減できるよう，監査資料の改善を含めた事務の効率化を図る方策を検討してほしい。

[一般財政]
滞納会費の督促が昨年度に引き続き積極的に行われ，特に長期滞納者の回収に結びついていることは大変評価できる。また，超過納入者への連絡等，きめ細やかな対応が行われていることも評価できる。次年度も引き続きの働きかけを期待する。
新型コロナ禍において，多くの新たな試みが軌道に乗っていることは大変評価できる。今後は，オンラインでの成果を踏まえながら，コロナ終息後に向けたオンラインと対面併用での運営の可能性等についても検討してほしい。

[出版財政]
事務の効率化を図るためにアウトソーシングを検討し，購読者に対し契約開始時期の変更可否調査等を実施したことは，会の安定的な運営を行う上で大変評価できる。担当者の負担が軽減されるよう，引き続き対応してほしい。
また，大図研出版物の購読者を増やし，広告収入を含め，収入増となる方策を検討してほしい。

2021年8月7日
大学図書館研究会会計監査人
鈴木宏子
津守久美子

【第３号議案】
第52期（2021/2022年度）活動計画案

地域グループ及び研究グループを核として活動を行う。地域グループは，北海道，千葉，東京，東海，京都，大阪，兵庫，広島，九州の9グループで構成される。埼玉地域グループは，前年度をもって活動を中止した。

研究グループは，長期的研究グループとして学術基盤整備研究グループが前年から活動を継続している。萌芽的研究グループについては申請がなかったため，今年度は設置しない。

会費は，前年度に引き続き，一括徴収方式を採る。2016/2017年度より前（支部制）の未徴収会費については引き続き，地域グループが責任をもって徴収する。

1．常任委員会

常任委員会の運営方法を引き続き検討する。原則として，オンライン会議とする。

常任委員は，特定常任委員や運営サポート会員の協力のもと，効率的かつ円滑な運営を心がける。

1.1　全国大会小委員会

引き続き，実行委員会形式で全国大会を企画・運営する。広く全国の会員から実行委員を募ることにより，企画・運営の機会を共有する。また，実地・オンライン双方の開催形式での開催ノウハウを蓄積するとともに，健全な運営に努める。

1.2　研究企画小委員会

大図研オープンカレッジ企画については，地域グループ・研究グループとの共催を含めて運営サポート会員の募集を行い，魅力的な企画運営と安定的な体制づくりを継続する。

地域グループ・研究グループは年度毎の募集を行う。オンライン形式での会議や研修会企画などを含めた活動を支援する。

1.3　会報編集小委員会

①　会報のあり方を特集企画担当者およびグループと共有する。

②　確実な発行サイクルを堅持できるよう行程を見直す。

③　会員からの投稿をより積極的に呼び掛ける。

1.4　会誌編集小委員会

2021年発行分から『大学図書館問題研究会誌』から，『大学図書館研究会誌』へ誌名変更する。2021/2022年度は，第47号の8月末発行を目指す。第47号から会員に電子媒体での無料頒布を行う。購読している図書館等への印刷物の販売は継続する。外部査読委員の謝礼として，2万円（1回あたり5千円）を計上する。

1.5　広報小委員会

- 大学図書館研究会ウェブサイトの利便性向上を目指し，サイトのリニューアルを行う。
- ウェブサイト，メーリングリストおよびSNSの活用を通じて，大図研の迅速な情報提供に務めるとともに，新会員獲得の一助となる情報の提供を行う。

2．五十周年記念事業

2.1　記念出版物編集小委員会

記念出版物を年度内に発行することを目標として，各種記録資料の作成，大図研の沿革に関する文章作成・寄稿依頼を，スケジュールを立てて進める。

2.2　海外図書館研修ツアー検討小委員会

新型コロナ禍の長期化のため海外図書館研修ツアーは2022年へ延期となったが，ツアー実施可否については2021年秋ごろに判断する。状況の悪化により2022年度にツアーが実施できないと判断した場合，ツアーはいったん中止とする。なお，訪問地は英国のまま変更しない。

3. ワーキンググループ

3.1　全国大会WG

従来，大会実行委員会でノウハウを蓄積しながら整備してきた全国大会実行委員会が使用する運営マニュアルについて，オンライン開催形式にも対応した情報を付加して作成する。

4. 事務局

4.1　事務局

①　全国委員会の開催

大図研の運営についての諸決定を行うため，全5回程度の全国委員会を引き続き開催する。原則としてオンライン開催とする。

②　常任委員会の開催

日常的な業務を遂行するため，引き続き常任委員会を開催する。原則としてオンライン開催とする。

③　大図研出版物の作業手順見直し

引き続き，大図研出版物の製版・印刷・発送作業を見直し，より低コストで省力化が図れるよう，事務局出版担当及び事務局組織担当と協議の上，検討する。

④　大図研会員への勧誘

大図研およびグループが開催する行事に，入会案内を配布する等，積極的に大図研の存在をアピールする。

4.2　事務局出版担当

2022年発行分より出版物の販売および販売管理のアウトソーシングを行うべく，引き続き検討・準備を進める。

出版物の在庫処分を実施する。

4.3　事務局会計担当

引続き，事務局内の各担当と連携し，業務を遂行する。

また，立替払等について早期の申請を促し，予算執行状況を可視化するとともに，紙の伝票類の散逸を防ぎ，業務の合理化および健全化を推進する。

4.4　事務局会費徴収担当

確立した業務フローを確実，適切に実施するとともに，納入率の向上を目指す方策を引き続き検討する。併せて，昨年度に試行した会費納入依頼のペーパーレス化について，定期実施に移行する。

4.5　事務局組織担当

事務局組織担当業務（会員に係る手続き，会報の発送管理，会員名簿やメーリングリストの維持・管理，地域および研究グループとの会員情報共有など）を迅速かつ確実に実施する。

会員情報の変更があった場合の対応方法について，会報やメーリングリストで定期的に周知し，会員情報のアップデートに努める。

5. その他意見交換

大図研の運営をスリム化することを目的として，下記について意見交換を行う。

5.1 出版物の販売について

2021年発行分より，会員については出版物のデジタル頒布を実施することとなった。購読機関については継続して紙版を販売している。この紙版の販売について，継続，縮小，廃止を含めて意見交換を行う。

5.2 会報の発行頻度について

月刊である会報の企画・編集には多大な労力がかかっている。この会報の発行頻度について，意見交換を行う。

【第４号議案】
第52期（2021/2022年度）予算案

【凡例】

- 全ての表の単位は「円」である。
- 差引額の「▲」は，マイナスであることを表し，前年度予算額よりも少額である状態であることを示す。

6. 2021/2022年度一般財政予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
前年度より繰越	4,428,211	3,377,548	1,050,663	3,377,548	
会費	1,700,000	1,900,000	▲ 200,000	1,610,000	注[26]
雑収入	10,000	10,000	0	259,858	注[27]
出版財政より繰入	0	752,600	▲ 752,600	771,375	注[28]
大会基金より繰入	0	0	0	406,391	
合計	6,138,211	6,040,148	98,063	6,425,172	

【注】

[26] 会員340名分で算出
[27] 全国大会収入，大図研オープンカレッジ参加費等
[28] 出版財政のうち組入金，会報発送委託費及び会報発送費の総和。出版財政予算もみよ

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
印刷費	20,000	940,000	▲ 920,000	864,777	注[29]
発送委託費	0	200,000	▲ 200,000	118,173	
通信費	150,000	1,150,000	▲ 1,000,000	728,081	注[30]
交通費	450,000	450,000	0	0	注[31]
編集費	32,000	12,000	20,000	15,800	注[32]
助成金	137,000	149,000	▲ 12,000	149,000	注[33]
研究活動費	140,000	160,000	▲ 20,000	50,000	注[34]
会議費	77,000	50,000	27,000	29,238	注[35]
消耗品費	10,000	25,000	▲ 15,000	16,955	注[36]
雑費	140,000	100,000	40,000	24,935	注[37]
予備費	4,982,211	2,804,148	2,178,063	0	
次年度繰越	0	0	0	4,428,213	
合計	6,138,211	6,040,148	98,063	6,425,172	

【注】
[29] 会員通知用宛名ラベル印刷費等
[30] 各種資料送料，会費納入通知送料等
[31] 全国委員会250,000円×1回，常任委員会40,000円×2回，会計監査120,000円×1回
[32] 非会員会報執筆者への謝礼1,000円×12，外部査読費20,000円
[33] 地域グループ会員70名以上35,000円×1（東京），地域グループ会員69-30名18,000円×3（京都・大阪・九州），地域グループ会員29-20名12,000円×2（東海・兵庫），地域グループ会員19-5名8,000円×3（北海道・千葉・広島）
[34] 長期的研究グループ20,000円×1，萌芽的研究グループ10,000円×0，講演等テープ起こし30,000円，関東・近畿合同例会テープ起こし20,000円×2，大図研オープンカレッジ関係費20,000円，その他研究活動費等
[35] オンライン会議費2,000円×12ヶ月分，会場費4,000円×（全国委員会1回＋常任委員会2回＋会計監査1回），全国大会backlog費，会議予備費
[36] 会報宛名ラベル代等
[37] 大図研webのマルチユーザ化40,000円，出版・管理WG調査費30,000円，会報印刷費・交通費等口座振込手数料等10,000円，表彰制度設計等20,000円，事務局外注費40,000円

7. 2021/2022年度大会基金予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
前年度より繰越	900,000	800,000	100,000	800,000	
一般財政より戻り	100,000	200,000	▲ 100,000	606,391	注[38]
雑収入	0	0	0	0	
合計	1,000,000	1,000,000	0	1,406,391	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
今年度大会会計へ支出	0	0	0	0	
来年度大会会計へ支出	350,000	350,000	0	100,000	注[39]
一般財政へ支出	0	0	0	406,391	
雑費	0	0	0	0	
次年度繰越	650,000	650,000	0	900,000	
合計	1,000,000	1,000,000	0	1,406,391	

【注】
[38] 第52回全国大会（オンライン）から戻り分
[39] 第53回全国大会準備金

8. 2021/2022年度出版財政予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
前年度より繰越	3,805,194	3,875,393	▲ 70,199	3,875,393	
刊行物収入	1,350,000	900,000	450,000	976,916	注[40]
広告料収入	0	0	0	0	
雑収入	0	0	0	18,804	
合計	5,155,194	4,775,393	379,801	4,871,113	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
印刷費	1,023,680	200,000	823,680	188,497	注[41]
発送委託費	33,660	0	33,660	0	注[42]
通信費	343,700	45,000	298,700	76,925	注[43]
消耗品費	10,000	40,000	▲ 30,000	27,802	
宣伝費	10,000	10,000	0	0	
会議費	0	10,000	▲ 10,000	0	
雑費	10,000	5,000	5,000	20,095	
組入金	0	434,000	▲ 434,000	434,000	
会報発送委託費	0	59,400	▲ 59,400	59,400	
会報発送費	0	259,200	▲ 259,200	259,200	
出版物販売委託費	100,000	0	100,000	0	
予備費	3,624,154	3,712,793	▲ 88,639	0	
次年度繰越	0	0	0	3,805,194	
合計	5,155,194	4,775,393	379,801	4,871,113	

【注】
[40] 会報『大学の図書館』40巻ほか1,200,000円＋『大学図書館研究会誌』47号150,000円
[41] 会報印刷費@300×月平均印刷208部×12ヶ月分×消費税1.1，会誌印刷費150,000円×1，封筒等印刷費50,000円
[42] 宛名ラベル単価@15×月平均発送170部×12ヶ月分×消費税1.1
[43] 会報発送単価@125×月平均発送170部×12ヶ月分×消費税1.1，印刷残部出版部宛返送単価@1000×12ヶ月分×消費税1.1，会誌発送費，請求書送料等

9. 2021/2022年度五十周年事業基金予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
前年度より繰越	895,514	955,114	▲ 59,600	955,114	
雑収入	0	0	0	0	
合計	895,514	955,114	▲ 59,600	955,114	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額（今年度予算－前年度予算）	前年度決算額	備考
記念出版物編集小委員会	785,514	650,000	135,514	0	注[44]
海外図書館研修ツアー検討小委員会	110,000	10,000	100,000	0	注[45]
シンボルマーク募集小委員会	0	60,000	▲ 60,000	59,600	
次年度繰越	0	235,114	▲ 235,114	895,514	
合計	895,514	955,114	▲ 59,600	955,114	

【注】
[44] 記念出版物刊行費，会議費等
[45] 参加者助成金，会議費等

【第５号議案】
第52期（2021/2022年度）役員案

●全国委員（21名）

項番	氏名	所属	グループ名	委員種別
1	青　山　史　絵	東洋英和女学院大学	東京	常任（特定）
2	赤　澤　久　弥	大阪大学	京都	常任
3	安　東　正　玄	立命館大学	京都	地域グループ推薦
4	磯　本　善　男	千葉大学	北海道	常任（特定）
5	井　上　昌　彦	関西学院大学	兵庫	地域グループ推薦
6	上　村　順　一	国立情報学研究所	東京	常任
7	柿　原　友　紀	熊本大学	九州	地域グループ推薦
8	楫　　幸　子	安田女子大学	広島・学術基盤整備	地域グループ推薦
9	加　藤　晃　一	新潟大学	千葉	地域グループ推薦
10	北　川　正　路	東京慈恵会医科大学	東京	常任
11	河　野　由香里	北海道大学	北海道	地域グループ推薦
12	小　山　荘太郎	三重大学	東海・京都・大阪・兵庫	常任
13	澤　木　　恵	東京海洋大学	東京・学術基盤整備	常任（特定）
14	下　山　朋　幸	（所属先非公開）	東京・学術基盤整備	地域グループ推薦
15	田　辺　浩　介	物質・材料研究機構	東京・学術基盤整備	研究グループ推薦
16	呑　海　沙　織	筑波大学	東京	常任
17	中　川　恵理子	金沢学院大学	東海	地域グループ推薦
18	中　筋　知　恵	小樽商科大学	北海道	常任（特定）
19	吉　田　弥　生	大阪大学	大阪	地域グループ推薦
20	渡　邊　伸　彦	京都大学	京都	常任（特定）
21	和　知　　剛	郡山女子大学	学術基盤整備	常任

●会計監査（2名）

項番	氏名	所属	グループ名
1	伊　賀　由紀子	大阪市立大学	大阪
2	鈴　木　宏　子	千葉大学	千葉

【参考】大学図書館問題研究会会則（抄）
第8条　この会に委員長1名を含む委員15名以上30名以内からなる全国委員会をおき、会務を担当します。
2　全国委員は会員総会において選出し、選出された委員は委員長を互選します。
3　[略]
4　全国委員会に若干名の委員による常任委員会をおき、通常の会務を担当します。
5　常任委員会に事務局をおきます。
6　この会に、2名の会計監査をおきます。

大学図書館研究会の会則改正（案）

昨年（2020年）の第51回会員総会の審議結果を受け，当研究会は，2021年1月1日より「大学図書館研究会」と改称したため，会則の改正を行う必要がある。

その他これを機に，下記のように会則の改正を提案する。

① 前文の削除
② 団体名変更（改正案第1条）
③ 入会資格（改正案第5条）
④ 会員の権利（改正案第6条）
⑤ 第4章「機関」を第4章「運営」とし，小見出しをつけて整理
⑥ 長の名称変更（改正案第8条など）
⑦ 全国委員の任期（改正案第9条3項）
⑧ 常任委員の任期（改正案第10条2項）:新設
⑨ 特定常任委員（改正案第10条3項）:新設
⑩ 副会長（改正案第12条2項）:新設

なおこの改正案については，2020/2021年度 第4回全国委員会（2021年3月20日）にて承認済である。

別紙として，新旧対照表を付す。

別紙

大学図書館研究会会則改定（案）新旧対照表

現行	改正案
私たちは、利用しやすく働きがいのある大学図書館づくりをめざして、大学図書館問題研究会に参加します。 　私たちは、大学図書館が広く社会とのつながりの中で成立しているとの自覚を持ち、現場で働く図書館員を中心に、生きた情報交換を通じて研究活動をすすめます。 　私たちは､それぞれの立場を尊重しながら、職場や地域での研究活動を基礎に全国的な交流を図って､大学図書館づくりをすすめます。	（削除）
第１章　名称	第1章　名称
第１条　この会の名称を「大学図書館問題研究会」とします。	第１条　この会の名称を「大学図書館研究会(Japanese Academic Library Association)」

現行	改正案
	とします。
第２章　目的および事業	第2章　目的および事業
第２条　この会は、会員相互の理解と協力を促進し、大学図書館の発展に寄与することを目的とします。	第2条（変更なし）
第３条　この会は前条の目的を達成するため、次の事業をおこないます。 （１）会報および機関紙の発行 （２）共同研究、調査 （３）全国大会の開催 （４）その他この会に必要な事業	第３条　この会は前条の目的を達成するため、次の事業をおこないます。 （１）会報および研究会誌の発行 （２）共同研究、調査 （３）全国大会の開催 （４）その他この会に必要な事業
第３章　会員	第３章　会員
第４条　この会は個人加入の全国単一組織です。	第４条（変更なし）
第５条　この会の目的に賛同し、会則に従う大学図書館員を主体にして組織します。ただし、その他この会の目的に賛同し、会則に従うもので、会員の推せんがあるときは会員になることができます。 第６条　会員はこの会のすべての事業に参加し、会報の配布をうけることができます。	第５条　この会の目的に賛同する大学図書館員を主体として組織します。ただし、その他この会の目的に賛同するものは、会員になることができます。 第６条　会員はこの会のすべての事業に参加し、会報および研究会誌の頒布をうけることができます。 【参考：頒布は有料を含む、配布は基本的に無料】
第４章　機関	第４章　運営
第７条　この会の最高機関を会員総会とし、会員はすべてこの会員総会に出席し､発言し、議決に加わる権利を有します。 第８条 この会に委員長１名を含む委員15名以上30 名以内からなる全国委員会をおき、会務を担当します。 ２　全国委員は会員総会において選出し、	(会員総会) 第７条（変更なし） 第８条 会員総会は年１回会長が招集し開かれます。ただし、全国委員会が必要としたとき、もしくは会員の３分の１以上の要求があるときは臨時に会員総会を開くことができます。

現行	改正案
選出された委員は委員長を互選します。 3　全国委員会は委員の過半数の出席により成立し、議決は出席委員の3分の2以上の賛成を必要とします。 4　全国委員会に若干名の委員による常任委員会をおき、通常の会務を担当します。 5　常任委員会に事務局をおきます。 6　この会に、2名の会計監査をおきます。 第9条 会員総会は年1回委員長が招集し開かれます。ただし、全国委員会が必要としたとき、もしくは会員の3分の1以上の要求があるときは臨時に会員総会を開くことができます。 2　会員総会の開催はその日より30日以前に提出議案を明記した文書をもって、全会員に通知しなければなりません。さらに都合により出席できない会員の意見も会員総会に反映するよう努めなければなりません。 3　会員総会は活動方針、予算、決算、役員の選出およびその他必要事項を審議し決定します。 第10条　委員長はこの会を代表し、会務を主宰し、会員総会、全国委員会、評議員会を招集します。委員長の任期は1年とし再任をさまたげません。 第11条　全国委員は会務を分担し、その任期は1年とします。 第12条　会計監査は会員総会において選出し、その任期は1年とします。 第13条　この会に、会の運営に関する重要事項を審議する評議員会をおくことができます。 第14条　評議員は会員総会において選出し、その任期は1年とします。	2　会員総会の開催はその日より30日以前に提出議案を明記した文書をもって、全会員に通知しなければなりません。さらに都合により出席できない会員の意見も会員総会に反映するよう努めなければなりません。 3　会員総会は活動方針、予算、決算、役員の選出およびその他必要事項を審議し決定します。 【以上、旧第9条】 (全国委員会) 第9条 この会に会長1名を含む委員15名以上30 名以内からなる全国委員会をおき、会務を担当します。【旧第8条1項】 2　全国委員は会員総会において選出し、選出された委員は会長を互選します。【旧第8条2項】 3　全国委員は会務を分担し、その任期は1年とし再任をさまたげません。【旧第11条】 4　全国委員会は委員の過半数の出席により成立し、議決は出席委員の3分の2以上の賛成を必要とします。【旧第8条3項】 (常任委員会) 第10条　全国委員会に若干名の委員による常任委員会をおき、通常の会務を担当します。【旧第8条第4項】 2　常任委員は通常の会務を分担し、その任期は1年とし再任をさまたげません。【新設】 3　常任委員会に特定常任委員をおくことができます。特定常任委員は特定の通常会務を分担し、常任委員会および全国委員会に出席する義務を負いません。【新設】 4　常任委員会に事務局をおきます。【旧第8条第5項】 (評議員会) 第11条　この会に、会の運営に関する重要事項を審議する評議員会をおくことができます。【旧第13条】 2　評議員は会員総会において選出し、そ

現行	改正案
	の任期は１年とします。 【旧第14条】 (会長) 第12条　会長はこの会を代表し、会務を主宰し、会員総会、全国委員会、評議員会を招集します。会長の任期は１年とし再任をさまたげません。【旧第10条】 　２　全国委員会に副会長をおくことができます。副会長は、全国委員のうちから会長が指名します。【新設】 (会計監査) 第13条　この会に、２名の会計監査をおきます。【旧第８条第６項】 　２　会計監査は会員総会において選出し、その任期は１年とします。【旧第12条】
第５章　組織 第15条　この会に地域グループをおきます。 　２　地域グループは、地域単位とします。 　３　地域グループは大学図書館問題研究会の目的を達成するために必要な事業をおこないます。 　４　地域グループに関する会則は地域グループで定めます。 第15条の２　この会に研究グループをおきます。 　２　研究グループは、研究テーマごとに会員が自発的にグループを形成し、申請することによって設置されます。 　３　研究グループは、設定された研究テーマに応じた研究活動をおこないます。 　４　研究グループは、長期的な研究活動を行う長期的研究グループと新規的・短期的研究活動を行う萌芽的研究グループがあります。 　５　研究グループに関する会則は研究グループで定めます。	第５章　組織 第15条　この会に地域グループをおきます。 　２　地域グループは、地域単位とします。 　３　地域グループは大学図書館研究会の目的を達成するために必要な事業をおこないます。 (以下、附則まで変更なし)

現行	改正案
第６章　財政 第16条　この会の経費は会費、事業収入および寄付金でまかない、会員は会費として年額5,000円を前納しなければなりません。 　２　この会の予算、決算に関することは会員総会に提案し、その議決を得なければなりません。 　３　全国委員会は会員の要求のあるときは、その都度会計簿を見せなければなりません。 　４　この会の会計年度は７月１日よりはじまり、翌年６月30日に終わります。 第７章　細則 第17条　この会則の変更は会員総会においてのみなされ、出席会員の３分の２以上の賛成を必要とします。 第18条　この会則は1970年10月25日より効力を発するものとします。 附則 この会則は、2014年８月23日から施行する。 附則 この会則は、2016年８月27日から施行する。 改正　1973年９月25日 　　1976年８月２日 　　1977年８月２日 　　1992年８月24日 　　1994年８月27日 　　2014年８月23日	附則 この会則は、2014年８月23日から施行する。 附則 この会則は、2016年８月27日から施行する。 附則 この会則は、2021年１月１日から施行する。 改正　1973年９月25日 　　1976年８月２日 　　1977年８月２日 　　1992年８月24日 　　1994年８月27日 　　2014年８月23日 　　2016年８月27日 　　2021年９月18日

綱領，ガイドライン，ミッション・ステートメントの取り扱いについて（案）

資料

現在，本研究会には綱領，ガイドライン，ミッション・ステートメントが存在する。これらはそれぞれ重なり合う性格を持つため，2020/2021年度 第4回全国委員会（2021年3月20日開催）にて審議した結果，綱領とガイドラインはアーカイブ化し，会の名称を変更した上で，ミッション・ステートメントのみ維持することとすることとしたので，提案する。

【参考】

● 綱領（デジタル大辞泉）

1. 物事の最も大切なところ。要点。眼目。
2. 政党や労働組合などの団体の政策・方針などの基本を示したもの。

● ガイドライン（デジタル大辞泉）

1. 政策・施策などの指針。指標。
2. ワープロやレタリングなどで、位置を示す線。
3.「日米防衛協力のための指針」の通称。

● ミッションステートメント（人材マネジメント用語集）

1. 企業とその企業で働く従業員が、共有すべき価値観や行動に関する指針や方針のこと。「企業理念」「行動指針」「顧客に対する宣誓文」等がミッションステートメントに相当する。
2. ミッションステートメントを制定し、企業及び従業員で共有し徹底することで、サービスレベルの向上やブランディングの一環として発展的に活用するケースも多い。

●大学図書館問題研究会綱領

わたしたちは、大学図書館の民主的な発展をめざして活動します。

大学は真理を探究し、科学の進歩、平和と民主主義、国民の生活向上に貢献する民主的な学問の研究と教育の場でなければなりません。

大学図書館は、その基盤にたってこそ発展するものであり、大学に学び働らくすべての人びとに、学問の成果を利用し、その発展に創造的に参加する権利、教育の権利と学問研究の場を保障するという役割をになっています。

わたしたちは、その目的を実現するためにあくまでも大学図書館の現実の問題を土台として、これまでの学問・技術の研究成果を批判的にうけつぎ､大学図書館の新しい科学的･実践的な理論の創造をめざします。

わたしたちは、大学に学び働らくすべての人びとと連帯し、また図書館に働らくなかまとともに、大学図書館の民主的な発展と図書館労働者の諸権利の擁護を中心課題とする諸活動を通じて、科学や文化の向上につとめます。

●「現場からの大学図書館づくりガイドライン」（1995年改訂版）

利用しやすく働きがいのある大学図書館の創造を求めて 1995.8

Ⅰ. 学生・教職員・社会に開かれた図書館サービスの向上に努めます。

1. 求める資料や情報の確実かつ迅速な提供に心がけ、貸出をはじめとした利用の拡大に努めます。
2. 教員との連携を強め、大学の教育・研究とかみ合った図書館サービスに努めます。
3. 講義・ゼミに必要な基本的資料の整備に努めます。
4. 開館時間・開館日は利用者の要望を考慮し、全学の合意を得て諸条件を整備して改善に努めます。
5. 入館や貸出などの利用手続きの簡素化に努めます。
6. 公平に利用されるように貸出冊数、貸出期間、書庫への入庫などの利用条件の整備に努めます。
7. 図書館の使い方や情報の入手方法などのガイダンスやレファレンスサービスの充実に努めます。
8. 情報メディアの多様化(視聴覚サービス、オンラインやCD-ROMによる検索）に対応した情報提供サービスの推進に努めます。
9. 広報活動や文化事業などのサービスを積極的に展開するように努めます。
10. 外国人留学生や図書館利用に障害のある利用者へのサービスにも配慮した運営に努めます。
11. 公開講座受講生や学習意欲のある市民が利用できるように努めます。
12. 資料提供の自由と個人情報の扱いに配慮した運営に努めます。
13. 利用統計や利用者アンケートなどを図書館サービスの向上に役立てるように努めます。

Ⅱ. 出版形態の変化に対応した資料の収集、受入、整理、保存体制の確立に努めます。

1. 資料収集の方針、計画、選択基準を明らかにし、系統的に蔵書を充実するとともに、保存体制・廃棄基準も明らかにするように努めます。
2. 利用者の要望、教育・研究・学習との関連を考慮した資料収集に努めるとともに、資料を利用するために必要な機器の整備にも努めます。
3. 自館の特色を生かしたコレクションを形成するとともに、学問分野、地域、館種ごとに可能な分担収集に努め、そのために必要な人員を確保するように努めます。
4. 交換や寄贈等により資料の収集に努めます。
5. 収集・発注・受入・整理の処理を迅速に行うように努めます。
6. 目録は様々な角度から検索できるようにするとともに広く公開できるように努めます。
7. 資料費の十分な確保に努めます。
8. 文化遺産としての資料を保存するため、資料特性を考慮した保存に努めます。

Ⅲ. 図書館運営の民主化と図書館職員の専門制度確立に努めます。

1. 利用者の要望に応える業務運営と専門的職業集団としての能力を高め、図書館の民主的運営に努めます。
2. 図書館の運営を決定する機関に利用者や図書館職員の声が反映するよう努めます。
3. 図書館の年間計画を作成し、必要な予算を確保するとともにその結果の評価・点検に努めます。
4. 図書館職員の人事上の処遇に、職務の専門性が考慮されるように努めます。
5. 図書館業務に必要な人員の確保に努めます。
6. 非正規職員の待遇改善に努めます。

7. 業務委託をできるだけ少なくするよう努めます。
8. 図書館職員の専門制度を確立するため、学内の理解を得るとともに日本図書館協会を始めとした関係諸団体との協力に努めます。
9. 「図書館員の倫理綱領」を大学図書館の現場に生かせるように努めます。

Ⅳ. 利用しやすく働きやすい安全な図書館施設をめざします。

1. 利用しやすい位置に図書館を設置するように努めます。
2. 開架、収蔵、業務などの空間を十分確保するように努めます。
3. 建物は可能な限り低層とし、主階を路面にあわせる等に配慮した設計に努めます。
4. 適切なサイン計画を取り入れるように努めます。
5. 教育、研究、学習、憩いに適した空間と快適な空調の確保に努めます。
6. ハンディキャップを持った利用者にも配慮した施設となるように努めます。
7. 図書館建築の計画は全学の意見・要望が尊重されるとともに、図書館職員と建築家が協力してあたれるように努めます。
8. 完成後の施設の機能を十分発揮するために必要な予算を確保するように努めます。

Ⅴ. 図書館業務電算化（システム化）の民主的推進に努めます。

1. 業務電算化に必要な措置は、図書館とシステムサイド、学内外の関連機関との連絡協力を密にし､円滑な推進に努めます。
2. 図書館システムの開発は、情報技術の動向や学内の情報環境も視野に入れながら、業務管理と情報サービスのツールとして図書館員だけでなく利用者にも使いやすいものとなるように留意します。
3. 個人情報の保護、データセキュリティに配慮したシステムの構築に努めます。
4. ディスプレイ障害やテクノストレスなどが生じないよう、職員の健康管理と職場環境の改善に努めます。
5. システムの運用に必要な職員への研修機会の平等な確保・充実に努めます。

Ⅵ. 図書館間の相互協力強化とネットワークの健全な発展に努めます。

1. ネットワーク化や相互協力網の形成は、個々の大学図書館の充実や健全な発展を基礎に、その延長として調和の取れた整備が図られるように働きかけます。
2. 学術情報センターが学術情報の流通を支える大学共同利用機関として発展するよう働きかけます。
3. 各大学図書館が、それぞれの特色を生かしたコレクションを育てることができるよう、国の財政援助の大幅な増額と公正にして効果的な配分となるよう働きかけます。
4. 国立大学外国雑誌センター館でのレアジャーナルの収集・提供は、本来必要とされるセンター館のコアジャーナル収集にしわ寄せが及ばないことに留意して充実されるように働きかけます。
5. 各大学図書館の資料収蔵能力の限界を抜本的に解消するため、地域ごとに保存図書館を設置することを盛り込んだナショナルプランの早期実現に向けて働きかけます。

Ⅶ. 日本国憲法を基本理念とし、開かれた大学づくりと図書館の自由の発展に努めます。

1. 「図書館の自由に関する宣言」を日常の業務に根づかせるように努めます。
2. 思想・表現の自由を擁護し、広く学術関

係諸団体との協力・共同の関係を築くように努めます。
3. 情報公開制度と個人情報保護の動きに注意を払い、図書館の自由との関連性を追求するように努めます。
4. 複写、複製技術と著作権や知的所有権の動向に関心を寄せ、公正な解決がはかられるよう努めます。
5. 非核平和、地球環境保全など時代が直面する課題に対して、大学図書館の情報発信機能強化に努めます。

●大学図書館問題研究会 ミッション・ステートメント（2013年8月10日）

「利用者にとって利用しやすい大学図書館」
「そこで働く人々が生き生きと活躍することのできる大学図書館」
「関係する全ての人々に活力を与えることのできる大学図書館」

この目的を達成するため、大学図書館問題研究会は次の活動を進めます。
(1) 大学図書館の現実に基づいた課題の把握
(2) これまでの事例報告・研究成果の活用、会員相互の協力・意見交換をとおした課題の解決・改善
(3) 課題の解決・改善の過程とその結果、独自に取り組んだ調査・事例報告・研究成果の情報発信
(4) 会員相互の交流
(5) 他の関係諸団体との交流

第52回全国大会　決算報告

【凡例】
全ての表の単位は「円」である。

〈収入の部〉

費目	決算額	決算備考	予算額	予算備考	差引額（決算－予算）
参加費	55,116	会員無料（要申込） @3,000*20 名（非会員）、 うち 19 名分は Peatix 手数料 4,884 円を控除	120,000	会員無料（要申込） @3,000*40 名（非会員）	▲ 64,884
懇親会費	0	オンラインで実施	0	オンラインの場合、 実施しても費用は不要	0
広告費	170,000	@10,000*11 社、 @20,000*3 社	160,000	@10,000*10 社、 @20,000*3 社	10,000
大会基金より繰入	100,000		100,000		0
合計	325,116		380,000		▲ 54,884

〈支出の部〉

費目	決算額	決算備考	予算額	予算備考	差引額（決算－予算）
会場費	16,170	Zoom Pro ライセンス 1ヶ月分 @2,200*4 ホスト 大規模オプション 1ヶ月分 @7,370*1 ホスト	8,800	Zoom Pro ライセンス 1ヶ月分 @2,200*4 ホスト	▲ 7,370
交流会費	0	オンラインで実施	0		0
機器費	0		0		0
印刷費	3,614	会報封入大会チラシ印刷費、会報封入費	3,000	会報封入大会チラシ印刷費	▲ 614
講師等交通費	50,000	記念講演講師分として @0*1 名（辞退） 分科会講師分として @5,000*2 名 シンポジウム講師分として @20,000*2 名	75,000	記念講演講師分として @20,000*1 名 分科会講師分として @5,000*3 名 シンポジウム講師分として @20,000*2 名	25,000
消耗品費	0	文房具購入費用	5,000	文房具購入費用	5,000
通信費	168	参加費請求書類郵送費用ほか	5,000	協賛企業宛書類郵送費用ほか	4,832
予稿集作成費	0	PDF で発行。 内製にて作成。	30,000	PDF での発行予定。 外注した場合の費用。	30,000
実行委員会費	26,400	Backlog スタータープラン料金（2021/07/15-2022/07/14）	10,000	実行委員の諸費用	▲ 16,400
予備費	1,100	振込手数料	143,200		142,100
大会基金戻入	100,000		100,000		0
小計	197,452		380,000		182,548
一般財政繰入	127,664		0		
合計	325,116		380,000		

第52回全国大会　参加申込者名簿

Ｙｏｋｏ　Ａｉｂａ（グループ無所属）
青　山　史　絵（東京）
赤　澤　久　弥（京都）
伊　賀　由紀子（大阪）
池　松　果　実（非会員）
石　井　美　絵（広島）
石　川　知　子（九州）
石　立　裕　子（東京）
石　津　朋　之（東京）
石　野　友　恵（非会員）
磯　崎　みつよ（東京）
磯　本　善　男（北海道）
市　村　省　二（東京）
井　上　昌　彦（兵庫）
今　野　創　祐（京都）
岩　井　雅　史（グループ無所属）
上　村　順　一（東京）
牛　島　千　穂（千葉・東京）
内　田　　栞（京都）
大　谷　　裕（東京）
小　川　ゆきえ（九州）
小　野　　聡（グループ無所属）
小　野　未来子（九州）
小　野　　亘（東京）
小野寺　千　栄（兵庫）
加　川　みどり（兵庫･学術基盤整備）
柿　原　友　紀（九州）
楫　　幸　子（広島）
加　藤　晃　一（千葉）
加　藤　信　哉（グループ無所属）
川　口　亘　代（大阪）
川　崎　陽　奈（九州）
川　端　幸　枝（北海道）
神　原　亜紀子（非会員）
菊　池　美　紀（埼玉）
北　川　正　路（東京）
久保山　　健（大阪）
黒　瀬　知　子（非会員）
桑　原　博　文（九州）
河　野　由香里（北海道）
郷　原　祐佳里（広島）
小　陳　左和子（非会員）
児　玉　恭　祐（非会員）
小　林　明　博（大阪）
小　林　和　実（東京）
小　林　康　隆（東京）
小　村　愛　美（大阪）
小　山　荘太郎（東海･京都･大阪･兵庫）
佐　浦　敬　之（グループ無所属）
坂　井　誠　司（東京）
坂　本　里　栄（九州）
佐　藤　正　惠（グループ無所属）
佐　藤　八千代（非会員）
澤　木　　恵（東京･学術基盤整備）
柴　田　正　美（大阪）
下　山　朋　幸（東京･学術基盤整備）
鈴　木　正　紀（非会員）
高　杉　幸　史（東京）
高　瀬　洋　子（東京）
高　橋　明日翔（グループ無所属）
高　橋　菜奈子（東京）
千　葉　まこと（東京）
辻　　佳　代（九州）
寺　島　陽　子（大阪）
徳　田　恵　里（兵庫）
得　能　由　貴（北海道）
呑　海　沙　織（東京）
中　川　恵理子（東海）
中　島　慶　子（東海）
中　筋　知　恵（北海道）
永　利　和　則（九州）
南　雲　修　司（東京）
南　雲　知　也（東京）
西河内　靖　泰（広島）
西　薗　由　依（九州）
西　脇　亜由子（東京･学術基盤整備）
野　田　ひかる（京都）
野間口　真　裕（京都･学術基盤整備）
野　村　　健（東京）
畠　山　花菜子（非会員）
花　﨑　佳代子（兵庫）
原　田　佳　子（九州）
平　山　紀　子（九州）
廣　田　　桂（九州）
福　島　幸　宏（非会員）
福　田　亜紀子（京都）
藤　倉　恵　一（埼玉）
ふじた　まさえ（非会員）
古　隅　阿　子（グループ無所属）
堀　越　香　織（グループ無所属）
前　川　敦　子（大阪）
槙　島　隆　教（東海）
松　川　隆　弘（大阪）
松　野　高　徳（東海）
松　原　　恵（東京）
宮　澤　豊　和（非会員）
宮　原　詩　麻（広島）
宮　丸　由美子（九州）
六　車　彩都子（兵庫）
村　岡　和　彦（大阪）
森　谷　めぐみ（グループ無所属）
森　藤　惠　子（兵庫）
矢　崎　美　香（九州）
山　形　哲　子（非会員）
山　口　和　美（東京）
山　口　由美子（九州）
山　口　友里子（東京）
山　崎　　圭（東京･学術基盤整備）
山　下　大　輔（九州）
山　下　ユ　ミ（京都）
山　田　美　雪（グループ無所属）
吉　井　悦　子（大阪）
吉　田　弥　生（大阪）
吉　場　千　絵（グループ無所属）
若　狭　あ　や（京都）
渡　邊　さ　よ（広島）
渡　邊　伸　彦（京都）
和　知　　剛（学術基盤整備）

第52回全国大会　運営役員名簿

実行委員長：
磯本　善男（北海道地域グループ・千葉大学）
副実行委員長：
加藤　信哉（グループ無所属・国際教養大学）
赤澤　久弥（京都地域グループ・大阪大学）
事務局長：
上村　順一（東京地域グループ・国立情報学研究所）

委員：
澤木　　恵（東京地域グループ・東京海洋大学）
高瀬　洋子（東京地域グループ・専修大学）
中島　慶子（東海地域グループ・豊橋創造大学）
西脇亜由子（東京地域グループ・明治大学）
松原　　恵（東京地域グループ・東京大学）
山口友里子（東京地域グループ・一橋大学）
渡邊　伸彦（京都地域グループ・京都大学）
和知　　剛（学術基盤整備グループ・郡山女子大学短期大学部）

大学の図書館　第40巻第12号（No.577） 2021年12月25日（毎月25日発行） ISSN：0286-6854
編集・発行：大学図書館研究会　年間予約購読料：送料共5,000円

□**大学図書館研究会出版部（出版物購入・問い合わせ窓口）**
〒195-8585　東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付
Fax：(044) 989-2250　E-mail：shuppan@daitoken.com
＜出版物購入代金等振込先＞ ゆうちょ銀行　振替口座：00140-6-482205 大学図書館研究会出版部
三菱UFJ銀行 越谷駅前支店　普通口座：1403054 大学図書館研究会出版部

□**大学図書館研究会事務局**
〒305-8550　茨城県つくば市春日1-2　筑波大学図書館情報メディア系 呑海研究室気付
E-mail：dtk_office@daitoken.com
＜会費振込先＞　ゆうちょ銀行　振替口座：00190-2-79769　大学図書館問題研究会

2021/2022年度会費納入のお願い

大学図書館研究会事務局会費徴収担当

大学図書館研究会の会費は、会則第16条に定められているとおり、前納制です。

> 大学図書館問題研究会則（抄）
> 第16条　この会の経費は会費、事業収入および寄付金でまかない、会員は会費として年額5,000円を前納しなければなりません。
> （中略）
> 4　この会の会計年度は7月1日よりはじまり、翌年6月30日に終わります。

会費納入がお済でない会員各位、会費の納入をお願い申し上げます。
グループご所属の方は、グループ活動費も合わせてお納めください。
当会の安定的な運営のため、ご協力をお願い申し上げます。

【問い合わせ先】
事務局会費徴収担当 kaihi@daitoken.com